

---

# ドラコ

呉璽立児

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドラコ

### 【Nコード】

N1155S

### 【作者名】

呉璽立児

### 【あらすじ】

都会から離れたおおかどしま大門島。その島に隠居する少年科学者……永峰ながみね文哲。ふみてつそこは誰に騒がれる訳でもなく、ひっそりと自分だけで研究を行える理想の地であった。そこに漁船沈没事故が発生する。文哲が救出した漁船に乗っていた老人は、大門島と双子島にあたる神無かみね島しまの今は亡き神を見たという。文哲は、神無島から卵の様な物体を持ち帰る。

— つの卵から始まるドラバタな毎日が始まる。黒と白の少女達、男友

達、その中で再び文哲は大切なモノを得る。

大門島に大怪獣が現れ

る時、唯一対抗手段を持つ天才・永峰文哲が出した結論とは……

## プロローグ（前書き）

## ブローグ

「今日も不漁<sup>カラ</sup>か」

漁師達は船上で今日も何も入っていない網を引き上げる。

海が荒れてもないのに、大門島<sup>おおかどしま</sup>の周辺では不漁が続いている。漁師達の顔には疲れと不安そして、諦めの表情が浮かんでいる。

「こりゃあ、海神様<sup>うみがみさま</sup>の所為かのう……」

1人の老人はそう呟いた。船に乗っていた 5人の若者漁師は、皆笑った。

「また爺さんの妄言が始まったぞ」

若者達は誰も取り合わない。

「フン。誰も信じはせんか。こんな老人の話を聞いてくれるのは、フミちゃんだけなもんか」

「フミちゃん？」

「ああ、あれだよ。内地から来たヤツ。名前は確か永峰<sup>ながみね</sup>文哲<sup>ふみでつ</sup>だったかな。アイツ、爺ちゃんのお気に入りなんだよ」

「ああ。アイツか。島でその日暮らしの仕事貰ってるっていう。確か前いた軍人さんの家に住んでんだろ」

「それにしても珍しいな……。あの島一余所者嫌いの爺さんが気に入るなんて」

別の漁師が意外そうに言った。「アイツ、爺ちゃんの昔話に付き合ってくれるんだよ」

「きつと嬉しいんだろうな。爺さんも何かと言えば昔の話ばかりするから、島じゃあ誰も話半分も聞かないからな」

「ケツ！こんな時に爺さんの与太話に付き合うほど暇なんて羨ましいこった。こつちときたら毎日漁に出たっておまんま食えないっていうのによ」

「ああ、違いねえ」

老人は、そんな自分と文哲を馬鹿にするような声が聞こえていた

が口を出さなかった。何故なら老人の視線の先に異常なものが映っていたからだ。

海が盛り上がる。

「なんだあれ。鯨か？」

水が盛り上がる光景を見た若者漁師の1人は、そう思った。

「いやあ……あ、あれは、そんなものじゃない」

老人は、そう淡々と言う。

「じゃあ、なんだって言うんだ!!」

海が盛り上がったのが原因で、船が傾く。

「おい！何かに捕まれ!!」

船の傾きが大きくなり、漁師達は焦り始める。

「あれは……」

老人は確信する。

そして、漁船は消息を断った。

大都市から連絡船で2時間。海に浮かぶ双子島の1つである大門島に到着する。この連絡船は島民以外に利用するものは少ない。だが、島民にとつては、島と内地を繋ぐ唯一の交通手段である。島では、連絡船を除くと個人で持つ漁船以外の交通手段はない。

そんな定期船から、降りてくる島民以外の青年が一人いる。彼の名前は、時任智ときとうちという。

智は、新聞記者であつた。彼がこの島に来たのには理由がある。それは、この大門島に世紀の大発明をした科学者が隠居しているとの情報を得てのことであつた。これは、智の上司がつかんだ本当か嘘か怪しい情報だつた。上司はこの取材を智に命令した。これは新入りの記者に、本当かどうか怪しい情報の記事を書かせて腕試しをしよう、という魂胆であつた。

正直、智はこんな田舎に長居するつもりはない。さっさと記事を仕上げて帰ろう、そう考えていた。

（それにしても、この島に宿なんてあるのだろうか？）

大門島に着いて智が一番に考えたのは、宿のことであつた。

大門島は、観光業が盛んな地域ではない。島の外から訪ねてきた来た者が泊まることの出来る施設があるのであるうか、智は不安が隠せなかつた。

「ハアア……」

智は深くため息をつく。

智は大門島に着くまでも情報収集をしようと心がけはした。

だが、船内にいるのは耳の遠い老婆と付き添いの中年男性だけであつた。老婆は、耳が遠くともに会話にならなかつた。中年の男性は、島外から来た智にキツイ視線を投げつけてくるばかりで、智は話しかけることができなかった。

この島全員が、自分に対して風当たりが強いではないだろうか？、そんな風に智は感じてしまう。

だが、人に話しかけなくて宿の場所を聞かなくてはいけない。そう智は考えるが、

（でも、どうせ話かけるなら似たような年の人がいいなあ）

とも思つてしまった。ずばり、腰抜けであつた、ヘタレだった。

幸い今は昼前である。その為に、男達は漁へと出ている。島に残っているのはわずかに島の山側で農耕をしている者達と、町には女の子供がいるだけである。

（もしかして……。町に大人の男がいたら、その人は目的の科学者じゃないのか？）

智は気を引き締める意味をこめてネクタイを結び直した。

そんな智の前に岸壁から糸を垂らす人がいた。

（釣りをしている、老人？ いや、少年かな）

そこには頭には麦わら帽子をかぶつた、16〜18歳ぐらいの少年が岸壁から足を投げ出すように座つていた。

第一島人発見！！ 智はしかも年齢が近く釣りをしていることを内心喜んだ。これほど話しかけやすい状況はない、そう考える。

「こんにちは、なにが釣れるんですか？」

智は少年に近づいて、そんなあたりさわりのない言葉を選んだ。

「ん」

声をかけられた少年は面倒くさそうに、智の方を向く。

「しいて言うなら夢だ」

「は、はあ」

まったく智が意図としない言葉は、彼の顔を一瞬で固まらせた。少年は、智のそんな反応に面白くなさそうな顔をした。

「オイオイ。なんだその反応は……。せつかくネタを振ってやったっていうのに、ハンカくせえなあ」

少年は不満そうに、中途半端にバカ、と方言を使った。智にはその言葉の意味が理解できなかった。

「暇だったり、煮詰まったりすると、こうやって海に糸を垂らすんだよ」

少年は糸を一旦引き上げ、もう一度沖に投げて見せる。

「それにしても……」

少年が智を見る。

「人間初めて会ったときの第一印象は大事だぞ」

少年は、ちなみに、と続ける。

「オレがお前に抱いた印象は、どこにでも売ってるような服を着た初めて会った人間にあたりさわりのない言葉を選ぶ、ヘタレだ」

智は思わず膝をつき頭を強打したくなる衝動にかられる。だがしかし、本当にやったらドン引きされそうだ。なによりも痛そうだからやらなかった。

「ここで、血を流すほど頭を打ちつければその印象も変わるのにな」少年の対応は、まるで智の考えを読んでいるようであった。

（せ、せつかくの仲良くなるチャンスが……）

常識を持つて接しているのは智の方だが、全て裏目に出てしまった。智は脳裏に走馬灯が浮かび自らの人生を見つめ直してしまいうになる。



そんな思考の旅に出ている智を知ってか知らぬか、少年はすと竿を上げた。

（こ、これはチャンスだ！！）

後悔の旅路に出ていた智は一瞬で現実に戻る。今こそ汚名を返上するとき。

そう、今がそのときだ。

「少年！ビックな夢は釣れたかい？」

芸能人は齒が命とも言いたげな良い笑顔だった。智にとっては渾身の笑顔と演技であった。

「は？」

取り扱い注意！！ボケを狙っている素人に素の反応で返すと、硝子の心は粉々に砕け散ってしまう。

海に飛び込みたい気持ちになる。もちろん父母に貰った命を粗末に出来ないでそんなことは出来ない。そもそも、少ないお金でかつた一張羅ではないか、もったいない。

やはり、ヘタレであった。

「いや、でもここで飛び込んだら芸人としてはおいしいのかな」  
あまりに打ちのめされた心は、自分が何者かも分からなくなっていた。だから、少年が既にその場にいないことさえ気が付きはしなかった。

「時任智！飛び込みます！」

「やめろって、兄ちゃん。春の海はまだ冷てえって」

「いや、ここで飛び込まなきゃ芸人が廃る」

「兄ちゃん、芸人さんなのかい？」

「……いや、違う……けど」

そんな素に戻った智と港番をしている男のやり取りを耳しつつ、港での釣りを終えた永峰文哲は港から家路についていた。

時刻は正午を過ぎた。だが港には、一隻の漁船も戻らない。

ということとは、

「今日も仕事はなしか……」

文哲は特定の仕事に就いていない。魚が揚がったときには手伝いをしたりしている。

文哲の家は、港と山の中間ぐらいの位置にある。

文哲は、漁師町を歩く。

周りには、古くはあるが瓦屋根の家が多数ある。家の外には、女達が大衆井戸に水を汲みに行ったりという光景が見て取れる。

水道は無いが、それでもそのことに不満がる者はいない。都会から来た者には、不満しか口からでない。だが島民にすれば、水道がなく、皆で井戸を使うことがこの島の常識である。

「フミちゃん、まだ港に船は戻らないのかい？」

文哲は、一人の女性に話しかけられる。

「まだ、港には漁船1隻も戻って着てねえな」

「そうかい……やだねえ、また魚1匹獲れないのかねえ……」  
女性は無痴をこぼす。

大門島の大半は漁師である。島に島外からの物が来ることは少ない。そのために島民達は、魚が獲れないと食料が必然少なくなる。

漁村を過ぎて家がなくなる頃あたりになると、文彦の家は見えてくる。明らかに周りの木で出来た日本家とは違う家がある。そこにはレンガ造りの洋風の家があった。

この家は、数年前までこの島に駐在していた軍人の大将が住んでいた。周りには、その部下達の住んでいた家の跡があるが、建物自体は撤去っされて存在していない。造りが良いために何らかの有事にこの家だけ残されたのであった。

文哲は数ある手続きを踏んでこのレンガ造りの家に現在住んでいる。

文哲は現在15歳である。だが、ただの少年ではなかった。それは、昔軍に属した科学者だったという経歴がある。

文哲は、ここに機材を持ち込み研究をしている。そして研究が煮

詰まり時間ができたときには港の手伝いをして生活をしているのである。

現在の文哲が研究している内容は、昔軍にいた頃に発見したエネルギーの実用化であった。ただ、現在はその軍も解体され居場所を失い、少ないコネを使って人目の触れない辺境で研究をしているのである。

そして、一つの任務も帯びていた。それは、双子島である大門島と無人島の神無島かみねしまに人が近づくのを阻止することである。神無島には旧軍の施設がある。この大門島に軍が駐在していたのには、そういった理由がある。

ただ、島民達はそういった事実があることを知らない。そもそも、島民達は、神無島に近づきたくない、といった考え、しきたりを持つているのでそこまで気を使う必要はないのが現状である。

文哲が家に戻りしばらくして、

「大変だ、フミちゃん！！」

若い男が1人、文哲の家に駆け込んできく。

だが、そういう大門島の平穏を壊す事件が発生した。第5江蔵丸が神無島付近で転覆したのだ。

漁民達は集会場に集まりどのように救出するのかを話し合っているのだと言う。

文哲は連れられるままに漁業を営む人達の集会場に呼ばれ顔を出した。

「……お前んとこが行けよ」

「そんなに言うなら、アンタがいけばいいだろ」

「クソ、いったいどうすればいいんだ……」

集まった人達は互いに救出にできることを押し付けあっていた。

第5江蔵丸が最後に消息を絶ったのは、神無島の付近である。その為、船員達は神無島に泳いでたどり着いている可能性は非常に高い。

だが、島の者達は誰として神無島に行こうとしない。

それは漁師達に様々な”げん”をかつぐ者が多いからであった。

たとえば、漁師は港に黒猫がいる事を好まない。その他にも、第五江蔵丸という名前にもも実際に前に4隻の江蔵丸があった訳ではなく、自分の好きな数字を付けているという、”げん”のかつき方がある。このように漁師は大漁の為に様々なことを信仰している。

そして、この島の一番の禁忌とされているのが神無島に上陸することである。これは代々大人から子どもへと伝えられてきた、大げさに言えばしきたりである。漁師だけではなく、島に住む全ての者がこの話を知っていて、神無島には行つてはいけない、と思つている。実際に昔に似たような事件が起きたときは、神無島に流れ着いた者を生贄として見殺しにしたという事例もある。

しかし、今は時が経過し信仰よりも人の命を大切にする時代である。誰も、このままで良いと思つている者はいない。

「僕が行きます」

硬直する漁師達の会話を断ち切るように、1人の立候補者が手を上げる。

それは、漁師ではなかった。手を上げたのは、会議の話を盗み聞きしてた……先ほどの島に着たばかりの智であった。

見たこともない青年の声を聞いて漁師達が一斉に智の方を向く。

「アンちゃん、誰だい？」

誰もが見たことないその顔に怪訝の表情を浮かべる。少しの間を置いて初老漁師の1人は、智に尋ねる。

「僕は、時任智と言います。先ほど連絡船でこの島に来ました」

「フン、余所者に何が出来るってんだ」

中年漁師が悪態を付く。

「黙ってないか！」

初老漁師がそれを戒める。

「……確かに、僕は余所者でこの島のことは何も知りません」

智は中年漁師の言葉に怯みながらも続ける。

「でも、僕は……僕は、こんな状況を何とかしたい、そう思つんで

す」

「したつけ、島までどう行くつもりなんだ？ アンタ、連絡船で来たんだろう」

「そ、それは……」

「ハン、都会モンはやっぱし口だけか」

考え無しに大口を叩いた智は漁師達の非難を浴びる。

「まあ、そう言っただけやなや」

文哲は智の肩をポンと叩いた。

先ほどまで、ただ聞いているだけで立っていた文哲だが、ここに来て初めて口を開く。

文哲は智より背が低い。だが、ことこの場面においては智より大きく見えた。

「誰も神無島に行きたくないだろう？ それでここでハンカクサイことしてるんならオレ行ってやるよ」

「フミちゃん……」

漁師達は一斉に口を噤んだ。元々、この事態は島の住人の間で起こった事件である。それなのに大の大人達はこうして助けに行く役目を押し付けあっているのである。誰もが冷静になるとこの事態を恥じていた。しかもそれを余所から来た青年達に諭されたのである。だからといって、  
『俺が行く』  
『いや、オラが』  
『……じゃあ、俺が……』  
『どうぞ、どうぞ』  
『という展開には、いたらなかった。』

誰もが、いつもは迷信だと思っている神無島が恐ろしかった。

しばらくの無言状態が続いて、まとめ役とも言つべき初老の漁師が口を開いた。

「すまない……文彦君行ってくれるか？」

「まかしときな」

文哲はそう啖呵を切った。

「ば、僕も連れて行ってください」

智は文哲に言った。

智は初めこの島に長くいるつもりはなかった。元々この島に来たのも取材が目的である聞く耳を立ててたのも、何か大きな事件が起きたのではないかと思ったからである。

今でもこの国の中では、人が住む地域が小さくなればなるほど様々な信仰が生きづいているのは理解できる。だが、漁師達の話聞いているうちにじっとしていられなくなった。

その為、手段がないのに漁師達を前に大口を叩いてしまった。だから、智はそのことを後悔しつつも、今自分に出来ることをしよう、そう思った。

後にこのことが、事件の当事者として新聞記者の智にスクープを与えることになる。だが、この時の智はそのようなことを微塵にも考えていなかった。

「永峰文哲だ。港で会ったとき名乗っていなかっただろ？」

文哲は港で出会った時とは違い智に好感を抱いた。まったく知らない場所であんな大胆な発言をすることが出来る者はそういない。

「時任智です。よろしくお願いします」

智は相手が年下であるが、何か敬意を表さなくてはいけない、そんな感覚を得た。

2人はガツチリと握手をした。

## プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。今回はオリジナル小説に挑戦しました。もし感想など残していただけると大変嬉しく思います。また、私自身未熟であることも自覚しておりますので、文章のおかしな部分等のご指摘下さい。私の力量を上げることがを私自身望んでいます。厳しい意見でも構いませんのでよろしくお願いします。

## 神も住まない無人島

文哲と智の2人は、港までの道のりを駆け足で進んでいる。

「ところで、フミさん……」

「あん？ オレのことか」

文哲はガラ悪く返事をする。これは彼が不機嫌なのではなく、全くといって丁寧な言葉を使わないからである。

それを知らない智は、少し怯みながらも続ける。

「皆から、フミちゃんって呼ばれてるじゃないですか。だから、僕にはフミさんって呼ばせてくださいよ」

「好きにすれよ」

文哲はあまり興味がなかった。

「フミさんは、船持っているんですね？」

「まあな」

港に着くが、周りには漁船しか見当たらなかった。文哲は、船がない方へと歩く。

智は不安を感じる。

「どこに行くんですか？」

「見てな」

文哲はズボンのポケットからボタンがついた筒状の物を取り出す。そして、ボタンを奥へと押し込む。

智にはこれが、まるで映画などのフィクションにある悪役が持つ便利スイッチのように見えた。

それから、まもなくして異変が起こる。

周りが爆発もしないし、地が抜けることもない。

だが、目の前にある海が突然割れた。水から生えるように船が出現する。

智はおもわず腰を抜かす。

船からは梯子が自動で降りてくる。



あまりの驚きの連続で智はまるで水の中にいる魚のように口を動かしている。

「何情けない顔してんだ。乗れよ、これがオレの船だ」

智からすると一瞬これが船かどうかさえ区別が出来なかった。海の下から出てくることも異常であつたが、角ばつた黒いボディ……重量感あふれるその船は何故水の上に浮いているのだろうか、そう智は感じた。

文哲は身軽にするすると梯子を登っていく。

船着場から乗ることを想定してないこの船は船上までの高さが必要であつた。

智は過去にこのような訓練をしたことがある。だが、ブランクがある為にゆっくりとしか登れなかった。

「何やってるんだ。出航するぞ」

文哲のヤジが飛ぶ。

「ちょ、ちよつと待ってくださいよ」

やっとのことで智は、船上に上がる。船上といっても甲板の様なものはなく、操舵室の扉があるだけである。

「出るぞ」

船は大門島出航する。目的地である神無島は、大門島の港から見ても反対側にある。神無島に向かうには、大門島をぐるりと回ることになる。

大門島の山を越えた裏側には砂浜がある。山を開拓すれば人が住めそうではあるが、存在するのはこじんまりとした赤茶けた鳥居が1つ孤立して建っているだけである。

船は着実に神無島へと向かう。海が荒れている様子はない。外的要因によって船が沈没することは、なさそうに思える。

「そういえば、フミさん。なんで島の人はあんなに神無島に行きたがらないんですか？」

智は疑問に思ったことを文哲に聞いた。

「ああ。何でも、神無島には龍神や海神って呼ばれる、荒神 まあ

用は災いを起こす神様がつてのが祀られてるらしいんだわ」

文哲は、船に乗ってからテレビの様な画面を叩いたつきり特に船を操舵はしていない。

「なんでも、相当昔に海が大荒れして大門島が大きな被害を受けたらしいんだな。それであの神無島に社を作って祀ったらしいんだわまあ、全部これから助けに行く爺さんの受け売りなんだけだな」

船は漁船が消息を絶ったであろう場所にたどり着く。周りに木の残骸が漂流しているので一目瞭然であった。

「なんだって、こんな所で……」

文哲は周りを見渡し、船にある計器を弄る。

（周りに環礁がある訳でもないし、海も静かだ……。なんでこんなところで？）

文哲は疑問に思う。

「フミさん！！」

智が突然大声を上げる。

「あそこ、見てください！」

智が指差す先には神無島がある。島の海岸から煙が立ち上っているのが文哲にも見て取れる。

文哲が再び画面を操作すると、船が動き出す。

暖をとる為か、こちらの船に気づいてかは分からないが、沈没した船員が神無島にいるのは間違いない。

島に近づくと漁師が自らのシャツを振っている光景が文哲、智ともに見て取れる。

「おい、おい」

海岸の漁師達が声を上げて文哲達に向かって大声をあげる。

「フミさん、この船どうやって着岸するんです？」

智は先ほど船に乗り込むまで苦労した。先ほどの乗り方は砂浜に對してすることは出来ない。

「そつなんだよな。コイツ、着岸すること全く考えてねえんだよ……しゅつたなあ……」

「え……まさか、この船つくつ……」

智が何かを言いかけたとたんに船は急にスピードを上げる。

文哲は一度もここまで船の操舵らしきことをしていなかったがここにきて、レバーを操作した。何かを話そうとしていた智の言葉は文哲の耳に入らなかった。

「何かに掴まれ」

「きゅ、急にそんなこと……」

船は砂浜に向かつて一直線に進み、海底に船底が押し付けられる。船の操舵室にも強烈な衝撃が起こる。あらかじめ、衝撃を予測していた文哲とは違い、智はしたたかに壁に頭を打ちつけた。

一方、神無島の漁師達は、海岸に乗り上げてきた船を見て一同顔を見合わせる。

「おい、こりやあなんだあ？」

「俺に聞くなよ」

「いや、俺だつて遠目で見たときは救出に来てくれた船かと思ったけど」

あまりの破天荒な着岸に皆、逃げ腰であった。

漁師達にはコレが自分達を助けに来た船というより、未知との遭遇をしたように思えた。

「おーい無事かあ？」

文哲は、操舵室の扉を開けて漁師達に向かつて叫ぶ。念のため漁師達を傷つけないように遠くに着岸させてのだが、漁師達は一向に近づいてこない。

「たつく、聞こえてねえのか」

文哲は操舵室から梯子を下ろす。

「おい、降りるぞ」

文哲は智に言ったが。

「いた、いた、痛い……」

自ら救出の役割を買って出た智は、痛がって文哲の声が届いていない。

「この軟弱者。だからヘタレだつつうんだ」

仕方なく文哲は1人で梯子を降りる。

人が降りてきたのを見て、漁師達がようやく近づいてくる。

「フミちゃん!!」

文哲の顔見知りの漁師が文哲の名前を呼ぶ。

「おお、無事だったかあ」

「無事なもんか……俺の可愛い江蔵丸が……」

「いいじゃねえか、命あつての物種だ」

漁師仲間が、互いに慰める。

「アンタがフミちゃんか。アンタが来てくれて助かったぜ」

「全員生きてるか？」

文哲は漁師達を見渡す。

「ああ。全員無事だ」

「オイ、それなら爺さんはどうした？」

「そういえば、見ねえな」

「爺さんなら海神様の社に行くつて、ひよろつと居なくなつたぜ。

まあその辺に居るだろ」

無責任な話であつたが、疲弊している漁師達に探しに行けという  
のも酷な話だろう。肝心のお手伝いも船の中で悶絶している。

仕方なく漁師達には先に船に上がって貰い、文哲は老人漁師を探  
しに行く。

社への道はすぐに分かつた。地形が砂浜から森になる境界線が見  
えた。だが一箇所だけ木が生えてなく、森の奥に向かって伸びてい  
る道がある。その道には石が敷き詰められていた。そのおかげで長  
年の時は経つであろう道の辛うじて見分けがついた。

文哲は社までの道を歩く。左右にある木は鬱蒼うつそうと生い茂っている。  
荒神が祀られているだけあつて、参道の道は不気味である。

風も吹かないのに木々は揺れる。呼応するかのように森全体が震  
えている。

カサカサ……ガサガサガ

来る者を拒む。そんな雰囲気漂っている。

しばらく歩くと壊れかけた鳥居が見えた。石作りの為長い時間手入れなしでも、現代まで残ることが出来たのであろう。木々に侵食されながらもはつきりと鳥居と見て取れる。

すぐに小さな社があり、そこに正座して手を合わせる小柄な人が見える。

「おい、爺さん！！」

近づき文哲は、老人を呼ぶ。

アマテラスオオミカミ

「……天照大神様と、そこにいわす……」

老人は社に向かって祈りを続けている。

「まあ、いいや。爺さん！ 海岸に船があるから、終わったらそこに行ってくれ」

文哲は老人から頷くような反応を貰うことは出来なかったが、了承を得られたことにしてその場を後にする。

文哲にはもう一つ確認したいことがあった……神無島にある旧軍の施設を確認することである。社までの参道が生きていた事にはもう1つの理由がある。それは軍が数年前まで秘密裏に使用していたからであった。社から少しずれた先には人工的に切り開かれた道が残っている。木が切られた為に草が無作為に生えている。

文哲がこの場に来たことは一度もなかった。漁師達が海に出ている間にあの船が神無島に近づくことは余りにも目立ちすぎた。こうして訪れることが出来たのだから、その施設だけは目にしておきたかった。

小さな長屋が見える。

「ここか……」

文哲は、長屋の前で立ち止まる。設計図は見たことがあるが、それはとても粗末な施設であった。

当時の国は重大なエネルギー危機に見舞われており、軍は新たなエネルギー開発に躍起になっていた。そして軍は、とある軍属科学者の発見したエネルギーに目をつける。ある一定の手段を踏むだけ

て無限のエネルギーを得ることが出来る。そんな夢の様な発見を当時の軍が放って置く訳がなかった。まだ、実用化もされていないそのエネルギーを軍は発見した科学者に無断で実用化しようとする。科学者はそういった事実を後で知った。そのエネルギーを開発した科学者は、永峰文哲という。当時10代に成るか成らないかの少年であつた。

「それにしても不出来だな」

開発した本人がそう言う。

確かに当時の国は、あまりにも資材が少なすぎた。しかも、実用化開発がされていないエネルギーの駆動施設である。設計図を見ただけでも施設のずさんが目に付いていた。それだけでなく、よりにもよつてこの施設のエネルギー炉心には一番大切な停止機構がついていない。その為にこの施設は不用意に止めることも出来ずに今日まで現存しているのである。

「さて」

一刻もこの施設を破棄したい文哲であつたが、今の彼に出来る事はなかった。

文哲は長屋の外へと出る。中の施設を見終えた文哲は次に長屋の周りを散策する。

「あん？　なんだここは」

不思議と森がなくなっている。そして、黒い山が鎮座している。

そして、怪しい物体が1つ。白くて丸い楕円状の物体がある。

その物体を軽く叩く。

「硬いな……」

見た目、質感だけではこの物体が何なのかは文哲にも分からなかった。

文哲はポケットから折りたたみの小さなナイフを取り出す。

表面を軽く削る。少し削った物質の軽く手で転がす。そして、少し口含んでみる。

「石でも鉱物でもない……どちらかといえば……卵か……」

カルシウムの味がする。

「卵つつたってこんな大きなもんが」

大きさは文哲の顎ぐらいまである。文哲の身長が175センチぐらいだとすると150センチぐらいの大きさだ。

文哲は持ち上げて試しにみようとする。

「そこまで重くないな」

重さは持てないほどでもない文哲の感覚では40キロといったところである。

普通の男子なら持つて運べる重さであつた。文哲は科学者としてこの物体の存在が気になった。

「海岸までつたら少し遠いが持つて帰るか」

ただ、神無島の物を持ち帰つたとすれば、

『ばかもん……神無島から物を持ち帰つてくるとは何事か!!』

あの老人が許さないかも知れないと思つた。

「しゃーない。森を歩くか」

長屋の建つ開けた箇所から森に差し掛かる。

（なんだ……）

背後からゾクつとしたものを感じる。振り向いてはいけないそんな感覚を得る。まるで猛獣に睨まれているかのようだ。

文哲は、そんな感覚に気がつかない振りをしつつ森を歩く。

文哲は冷や汗が流れた。体内の感覚がずれる。気がつけばあつという間に森を抜ける。

「つたく、なんだつてんだ。なんもねえじゃねえか」

まるで、頭から食べられるような気配が続いたが森を抜けるとその気配も失せていた。

文哲は後ろを振り向くがそこには何もいない。

文哲は船へと戻る。ただ、直接梯子で操舵室まで運ぶのではなく、船壁についているコンテナがあるため、便利スイッチを押しコンテナの扉を開く。

文哲は船にあるコンテナに卵をしまった。

「フミさん」

操舵室から役立たずが顔を出す。

文哲は梯子を上り操舵室に戻る。

「おお。フミちゃん、爺さんいたか？」

「いたぜ、まあしばらくしたら来るだろ」

文哲の言うとおり、それからまもなく老人漁師が船の元までたどり着いた。

「すまないな、フミちゃん。迎えに来てもらって」

老人は疲れた声を搾り出すように吐く。

「まあいいつてことよ。もういいのか？」

「ああ」

老人は頷いた。

「じゃあ、出るぜ」

文哲は、機器を操作する。船は砂浜を抜けて大門島への帰路に着いた。



## 神も住まない無人島（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

また、むさい男達しか出てきませんでした。次の話からようやくヒロインが登場しますので、楽しみに。

## 一度坂を転がり始めた大玉は止まらない

文哲達が大門島に到着したときには、日がかなり傾いていた。

「フミちゃん、ホントにありがとよ」

「助かったぜ」

若い……といってもこの島では世帯持ちだが、漁師達は文哲に次々と礼を言う。そしてそれぞれの妻子の元へと戻っていく。

「……戻ったぞ」

「無事でよかったよ」

泣きくずれるもの。

「このバカ亭主が……！」

「いてーよ。母ちゃん」

叩かれている者。その光景は人それぞれだ。

「フミちゃん、是非お礼をさせてくれよ」

漁師の妻が1人近づいてくる。

「オレはいいわ」

文哲は手をヒラヒラと振って返す。

「……そうかい、じゃあそのアンタはどうだい」

「え！？ 僕ですか」

智は驚嘆する。実際、意気揚々と着いて行ったものの何も出来なかった事を後悔していた。

「そうだよ、アンタだよ。いやあ、集会場でのアンタかつこよかったよ。馬鹿で何もしない男共に渴を入れていたじゃないか。内地の男も捨てたモンじゃあないねえ」

智の中で黒歴史化していた、その事を言われて智は落ち込む。

「ウチの娘を嫁に出すなら、アンタやフミちゃんみたいな男がいいよ」

「何……！ 娘はやらんぞ」

旦那が口を挟む。娘を目に入れても痛くないというばかりの剣幕

であつた。

「やだねえ。冗談じゃないか、まだ2つだよ。まったく、馬鹿なんだから」

「あ、ああ。そりやそうだよな」

夫婦は港中に響くよう大声で笑う。

「フミさん、どうしましょう？」

「そんなの、テメエで決めろや」

文哲は冷たく切つて捨てる。

智は少し考える。

「えつと、じゃあしばらく宿を借りられませんか？」

「なんだい、そんなことでもいいのかい？　ウチでよかつたら大した  
持て成しは出来ないが、泊まっていきな」

「ウチの娘はやらんぞ」

「まーだ、アンタはそんなこと言つてるのかい」

海の間人達はどこまでも豪快だった。

智は後で家を訪ねる趣旨を伝えると漁師夫婦は家路へと着いてい  
つた。

「フン。若い者は能天気ばかりだ」

残された老人はただそう言う。

「若い者は、アレを鯨だ、潜水艦だといってたが」

老人は漁船事故のことを文哲に話す。

「あれはそんなもんじゃねえ」

「何か見たんですか？」

智が老人に尋ねる。

「渴ッ！！　余所者に話して聞かせることなどないわ」

老人はどこまでも頑なであつた。

だが智は記者として、ここで怯むわけにはいかなかった。

別のアプローチを試みる。

智は、ちよつと老人から話を聞きだしてくれ、という趣旨の目配  
せをする。

「え、何、晩飯奢ってくれんの？」

「違うよ」

智はもう一度目配せをする。

「いや……あの……お願いされてもオレそんな趣味ねえし。悪いけど他あたってくんない？」

「そっちの方が余計に違うわ！！ しかも妙なお願い伝わってるし……。ねえ、わかってるんですよ。お願いしますよ。晩御飯は奢りますから」

智は後半部分だけを文哲に聞こえるように言う。

「じゃあねえなあ」

文哲は重い腰を上げる。男からの熱視線を長く受け続けていても仕方がない。

「なあ、爺さん船で何があつたんだ。あそこの海域を見たが、とても船が沈没するようには見えなかったぞ」

船の中でも港に上がっても沈黙を保ってきた老人は、ようやく重たい口を開く。

「ああ……アレは……」

老人は智が聞く耳を立てていることに気が付き、話を切り再び睨みつける。

「ひい……」

あまりの形相に智は、悲鳴をあげる。

「ふん。別にワシは余所者に聞かせるんじゃない。フミちゃんがどうしてもって言うから、話すんだ。わかつとるのか！？」

智は声を出す事もできずに首をただ縦に振る。

「アレは間違いなく島の主様だ」

「前に聞いたあの話か？」

文哲には聞き覚えがある。智にもこの老人から聞いた内容を要約して話していた。

「そうだった。どこまで話したかな……。ワシの爺様からこんな話を聞いたことがある」

老人は自分が子どもの頃聞いた昔話を思い出す。

「昔な、神無島が神島かみしまと呼ばれていた時代があったそうだ。神島には主が住んでいて、よくお供え物をしたり、不漁で酷いときなんて生贄を奉げたりしとった。だが、島の者は時が経つにつれて、不漁が続くのを主様が災いを起こすからだと思っようになった。不漁そして、あの島からとうとう神様は姿を消したそうだ」

「その主の神がいなくなって、神無島という訳か」

「ワシにもどれが本当のことかは分からんがな。だがワシが船で見たのは間違いなく主様だ」

老人は身体を震わす。

「……馬鹿でかい口と目と……。今思い出しだけでも恐ろしい。主様は間違いなく怒っておる。大門島に災いが起こるやもしれん。くわばら、くわばら……」

老人はそう言い残し港を後にする。

港には文哲と智は残された。

「フミさんはどう思います？」

智は今までメモをしていた、メモ帳から目を離し文哲に尋ねた。

「どっちでもいいんじゃないかねえ」

「そんな適当なあ！？ だって鯨だったらいいですけど、他国の潜水艦だったら大事件じゃないですか」

もし、外国の潜水艦と衝突したとしたら、これは外交問題まで及ぶ。そうしたら、新聞の1面に載るような大事件に発展する。

智としたら諸国情勢の不安もあるが、スクープを手にするかもしれない大手柄かもしれない。

「鯨、潜水艦、神無島の主どちらにしたって困るのはオレ達じゃない。気の毒なのはあの漁師達だ」

文哲は漁師に同情する。魚が獲れない今の現状で、再び船を1隻買うのは容易なことではない。

「まあ、新聞記者の智君からすれば漁船が潜水艦に当たって沈没した方が話題性があるんだろうが」

「なんで、僕が新聞記者だつて？」

智は今まで島で会った人に自分の身分を明かしたつもりはない。確かに、島に訪れる人が少ないこの島では、外から来る人が限られているのであるのだろう。だが突然職業を言い当てられた智は驚きを隠せない。

「それで隠してるつもりか？ ハンカクセえ」

「あ、しまった……メモ帳が会社から支給されたやつだった……」  
そのメモ帳には新聞社名が書いてあった。

「そうですね、そうですね。確かに新聞記者としたら、潜水艦の方が話題性がありますよ。そっちの方がいいとは思いませんけどね」  
智は身分がばれてしまったこともあり、開き直る。

「ただ、お爺さんが話してたことは幻想的過ぎて記事にはできませんけど」

智は漁船が沈没したことを記事にしたら苦情殺到、その前に上司に怒鳴られる、そう思った。

「ああ！？ なんだと、幻想なめんなよ。科学で解明できない幻想があるからこそ男は燃えるんだろうが。男には幻想に対するドリルという浪漫が必要なんだよ」

智の思いもなかった一言が文哲を変える。文哲は次から次へと科学者らしかぬ妄言を吐き散らす。

「そう、男はドリル！！ おお、そうだ環境調査船・デストロイヤーにドリルを搭載しよう。そうだな、船先にとびきり大きいのを……」

文哲は先ほどのった船 デストロイヤーの改造案を思いつく。

「……いや、環境調査船にドリルって」

「何言ってるんだよ、必要だろうが。オホーツク海の観光船にも、その内オレがドリルつけてやろうと思ってるんだ。海軍犬や他国の密偵船に遭遇したときに粉碎するためにドリルは必要だ。観光ついでに、自国も守れるんなら一隻二ドリルじゃねえか。じゃあ、もう一個どっかに付けねえとだな」

「って、船の中でも聞こうと思ったんですけど、やっぱりあの船まさかフミさんが作ったんじゃない？」

「え、違う違う。えっと、あれは、」

新聞記者を手前に熱くなりすぎ、文哲は言い訳を探す。

「そうそう。船はオレの爺ちゃんが作ってくれるんだよ。」

「文哲さんのお爺さんが？」

智が疑いの眼差しを浮かべるので、文哲は更に取り繕う。

「そうそう、神にも悪魔にもなれる船だ。ってウチの爺ちゃん一晩で作るんだ。すげーだろ。」

「絶対に嘘だ！！」

このわずかな時間でノリツツコミができるほど成長した智を文哲は、褒めてあげたくなった。

「あーじゃあ、顔面状の岩にあった超古代……」

「それも、嘘だって分かってるからな。あと、同じような形をした船が3隻あって合体するって言うのも無しですからね。」

「あれはあれで操縦員は大変なんだぞ。合体のタイミングが、かなりシビアだからな。」

「はいはい。いい加減に本当のこと言ってくださいよ。」

文哲は正体をばらす訳にもいかず、次の逃避手段を考える。

（てか、いつまでオレはコイツの相手をしてるんだ）

さっさとこの場を離れればよかったことに気がつく。

「オレこの後用事があるんから。じゃあな。」

「え、ちよつと！」

文哲は振り向かず、智を無視して退散する。

「さあーて。さっさと卵を運ぶリアカーでも借りてくるか。」

コンテナから卵を運び文哲の家まで運ぶには、かなりの距離がある。神無島のように手で運ぶのはかなり困難だ。

「まあ、リアカーなんてこの島じゃあ誰でも持ってるし、ちゃちゃっと借りるか。」

案の定、「リアカー貸してくれ」「いいよ。持ってきてな。」とい

う簡単なやり取りで借りることが出来た。

文哲は港へと引き返す。途中影から港を眺めたが、そこにはもう諦めたのか智の姿はなかった。

船のコンテナに積んである卵をリアカーへと移す。

「さて、帰るか」

文哲は、自分の家がある山の麓へと向かう。途中登り坂もあるがリアカーがあるため苦はなかった。

漁師町には、男達がお酒を呑みに出歩いている。

「ちよつと、付き合わないか？」

何人もの漁師達が文哲を誘う。

「今日は、止めとく。わりーな」

文哲は全員にそう返す。

文哲はこの島で嫌われてはいない。暇なときは何時も島民の手伝いをしているから、皆好印象を持っているということもある。だがそれだけではない。この島には、10代、20代の青少年が圧倒的に少なかった。漁師を志すもの以外は島を出て行ってしまうのである。その為、老人達からは孫の様な扱い、それ以外の者からはいつも弟の様な扱いを受けている。灰汁あくの強い文哲だからこそ島民達は彼が可愛くてしかたがないのだという。文哲自身もそんな島民の態度に決して嫌なものは感じていなかった。

文哲は自宅に到着すると卵をリアカーから降ろし、中へと運ぶ。

「なんか置く場所は……」

見渡す限り乱雑に散らかった室内。重要な物は別にあるが、リビングも様々な書類や機材で溢れている。

一見置いておく場所がないかとも思ったが、適当な私物を置いてあった大きなダンボール箱があった。この箱には仮眠用の毛布とどこから持ってきたのか手ごろな大きなさで枕にちょうど良いイルカのぬいぐるみがポツンと入っていた。

「これでいいか」

毛布がクッションの役割を果たし、尻尾が弧を描いているイルカ



を梱包剤の代わりにすれば転倒することも防げそうであつた。

変わりにいつも寢床の変わりにしてあるソファーが使えるようになった。寢室もあるのだが、文哲は基本的にいつもこちらのソファーを寢床に使用していた。

「それにしても今日は疲れたな」

いつもの田舎でのスローライフと比べて今日の大門島は事件で溢れていた。夕飯も食べていないが、早めに床に着くことにする。

明日はいつものんびりとした生活が戻ってくることを信じて。

「フミちゃん、フミちゃん、フミちゃああん」

時刻は朝の6時、騒々しくも漁師の1人が文哲宅のドアを叩く。

文哲はもちろん起きてはいない。通常、文哲が時計の針が10の位まで届く頃まで起きることはない。

文哲は、目を覚ます。

とてもじゃないがうるさくて寝ていられない。

文哲は朝に弱くフラフラしながらリビングを歩く。機材が投げ出してある為に途中何度もつまづきそうになる。その為、ただ1つリビングの変化に気が付かなかった。

「だあああ、うるせええ。ったく何のようだ」

文哲は溜まった鬱憤を当人にぶつける。

「ふ、フミちゃん。や、や、や山の上にてっけえ顔が……」

漁師は何かに脅えながら、大門島唯一の山の頂上を指差す。

「あ？」

ねむけまなこ

眠気眼ながらも文哲は山を見るが、特に変わっている様子はない。

「なんもねえじゃねえか」

「え、う、嘘だろ。ちゃんと見てくれよ」

「嘘じゃねえよ。そんなに言うならテメエの目で見てみれや」

漁師は、ビクつきながら同じ方向を見る。

「ホントだなんもねえ」

文哲はため息をついて家へ引き返そうとする。

「フミちゃん！ 」

「今度は何だ！ 」

文哲を呼ぶ声がした。文哲の家に向けて中年の女性が駆け込んでくる。

「ふ、ふ、フミちゃん、こつちに頭から墨をぶっかけたような格好をした女の子が来なかったかい 」

山の上の顔の次は、真っ黒な格好をした女の子を捜しているのだという。

「その娘、ウチから食料盗んでいったんだよ。たしかこつちの方に来たようにみえたんだけど 」

「あいにく、見てねえな 」

隣にいた漁師も見えないと顔を横に振る。

「まったく困ったやつもいたもんだよ 」

中年女性は、ため息をつく。

残念ながら、山の上の顔も奇妙な格好をした少女も情報が少なすぎて文哲にはどうすることも出来ない。

漁師と中年女性は、何の収穫もないまま文哲の家を後にした。

「まったく、朝から騒々しい 」

愚痴を吐きつつ文哲は家の中へと戻る。確かに文哲は、大門島でなんでも屋のようなことをしている。だが、今回は曖昧すぎて動きようもない。

「まったく、本当ね。どうして人間ってこつちも騒々しいのかしら 」

文哲の聞いたこともない声が突如リビングから聞こえる。

「誰だ！ ？ 」

文哲は恐る恐る顔を出す。

そこには小さな少女がいた。彼女はまるで頭から墨を被ったような漆黒の欧州中世を思わせる服装をしている。彼女は床に付きそうなほど長い黒髪をなびかせる。黒い髪は、この国に住む殆どの者が持ち合わせている特長である。だが、その少女の顔作りは特徴的だ。

まるで名工が愛情こめて作り上げた人形のような容姿は、幼いながらも色っぽさすら文哲は感じた。そして、その容姿と服装はまったく違和感を感じさせなかった。

「盗んだのはお前か」

中年女性が証言した奇妙な格好がそれに一値していた。何よりも、漁師達が雑魚と呼ぶ魚をその両手に抱えていた。姿形と似合わない持ち物は違和感しか感じない。

「置いてあったから、拾っただけよ」

確信犯かそうでないのか、少女はそう言い雑魚を数匹口に入れ飲み込む。

「そういえば、文哲。貴方の質問に答えていなかったわね」

話の脈絡すら壊す、彼女の唯我独尊っぷりに文哲は頭が痛くなる。「自己紹介をしましょうか。私の名前は、ゴットジークフリート・ランボルギーニというの。さっき考え付いたの。カッコいいでしょ」

少女は堂々と偽名を名乗りながら優雅にスカートの端をつかんでお辞儀する。確かに可憐であつた、ただその手から雑魚が落ちることを除けば。

「偽名のくせに長いげえな。短くしてゴジラって呼んでいいか？」

「バカ。やめなさい！！」

「略されて困る名前なら、そう名乗るなよな」

「せっかく頑張つて考えたのに……そんなにいうなら文哲が何か力ツコいい名前を考えてよお」

偽名少女は、そう顔に涙を浮かべて言う。何故か文哲は、自分が目の前の少女を苛めているような感覚に陥る。

正直面倒くさい、文哲はそう思う。適当に頭の中に単語を羅列する。

「うん、あー、じゃあ龍子でいいんじゃないか？」

「なにそれ、響きがかっこよくないんだけど」

少女は顔を膨らませて表情を変える。

「いや、でも龍だぞ。ドラゴンだぞ。ほら、かつこいいじゃないか」

もう、このやり取り自体が面倒くさい文哲は、ゴットジークフリート・ランボルギーニでなければ何でもよかった。

「そうかしら？ 龍……ドラゴン……こ。……」

少女は考えにふける。

文哲は、適当な言い訳交じりの名前に思いをはせている彼女を、  
(ある種の頭が弱い子なんだなあ)

と哀れみの視線で見詰めた。

「よし！！ 決まった、私の名前はドラコだ」

どうだ、いい名前だと言わんばかりの叫び声を上げた。

「いい、いいじゃない、ドラコ。フッフ、この名前を世界中に轟かせる日が楽しみだわ」

「あーよかつたじゃないか、龍子」

「龍子じゃない、ドラコ！！ まあ、アイデアくれた分貴方には感謝しておいてあげるわ」

ドラコはオリジナルの名前付けたみたいな顔をしているが、イギリスかどつかの三流悪役みたいな名前だとして文哲は思わなかった。  
「はいはい、じゃあ満足したならさっさと帰ってくれ。第一、どこから入って来たんだか」

文哲は玄関までのドアを開けて退室を促す。目の前にいるドラコと関われば面倒事に巻き込まれるような気がした。だからこそ一刻も早くこの場からいなくなつて欲しかった。

「どこって邪魔な壁をどけて入ってきたわ。どう？ これで住処すみかに入りやすいでしょ？」

ドラコは、してやったり顔で大穴が空く元は壁があつた場所を指差す。そこには150センチも身長のない彼女が入ってくるにはあまりにも大きな穴あつた。

「おいおいおい！！ どうすんだよこれ」

壁に空いた大穴を見た文哲は、今度は自分の口の穴が閉じなくな

る。

「それにね、私はまだ帰らないわ」

啞然としてる文哲にドラコは言う。

「だって昨日貴方に託した可愛い我が子の顔も見えていないんだもの

」

「は？」

」

そんな身に覚えのない文哲は、ドラコの一言に愕然とする。いつも適当に生きている文哲は久しぶりに真面目に疑問顔を浮かべた。

一度坂を転がり始めた大玉は止まらない（後書き）

こんばんわ、呉璽立児です。ようやく3話目にしてようやく女の子の登場です。長かったですね……。プロットの段階では、神無島で登場予定であった龍子……じゃないドラコさんです。タイトルどおり、この小説のキーキャラクターです。

それにしても、女の子が始めて出てくるのが3話目と言うのはどうなのでしょうか？ やっぱり序盤のインパクトが大事だというのに遅すぎたという後悔があります。

それでは、また次の話でお会いしましょう。

## 卵の身にご用心

「だってそうじゃない……昨日貴方、私の可愛い可愛い子どもをさらっていったでしょ」

「いや、待てそれは何の話だ!？」

ドラコは文哲に詰め寄る。身に覚えがない、文哲の混乱は更に深まる。

「ひ、酷いわ、文哲。貴方がそんな男だったなんて……。連れて行ったなら、貴方は父親みたいな者じゃない!!」

ドラコは泣き崩れる。

とてもドラコが嘘を言ってるようには見えない。彼女に先ほどまでの余裕のようなものではなく、第3者が見れば文哲は警察に通報されて手錠をかけられるであろう。

「フミさん。いるんですよ。勝手に入りますよ」

「認知しなさいよ、責任取りなさいよ、それが大人ってもんでしょ!!」

場は一変して修羅場と化す。そこに現れる第三者。しかもよりもよって智だ。

「きゃあああ」

文哲は女性のような悲鳴を叫んだ。

「……」

「ち、違うんだ。コレはこの女が勝手に言ってるだけで文哲が弁明をするたびにそれは、嘘くさく回りに伝わる。」

「……フミさん。僕はこういった間違ったことをそのままにはしておけません……。記事にして世に知らしめます」

「やめる、やめてくれ……」

「それより、どこへやったの!? 私の卵は!!」

「へ? 卵」

文哲が卵と聞いて思いつくものは、ただ1つである。リビングの

ダンボールに昨日置いておいた……

文哲の視線の先に、

「アレ？」

卵はなかった。いや、ありえない。だって確かに昨日置いておいたはずである。

文哲はダンボールに近づく。

「痛てっ！」

何かを踏みつけ、文哲の足に痛みが走る。

（これは……殻？）

ダンボールの周りには、白い破片が散らばっていた。

「なんだ、ちゃんと大事にしてるんじゃない……冗談も休み休みにしなさいよね」

さっきまで取り乱していたドラコは、安心し「まったくもう」と安堵のため息を付く。

文哲はダンボールの中身を覗く。

「な、なんじゃこりゃああ……」

思わず大声を上げざる終えなかった。

「な、なんですか」

智も覗く。

「ふふふ、可愛いわ」

ドラコはダンボールの中身を見てふやけた顔になる。

「フミさん。やっぱりこういう趣味の人だったんですね」

「違うわー！ おい、龍子説明しろ、これはどういうことだ！」

文哲はドラコに迫る。

「龍子じゃなくて、ドラコ！ 説明も何も見た通りじゃない。それにしても文哲、貴方早いよね」

「そういった卑猥に聞こえる発言は止める。見たとおりってこれじゃあ……まるで」

タンボールの中。すなわち、卵の中身の正体はドラコと同じく中世貴族の衣装のような白い衣装を身に纏った少女であった。まるで



箱の中の少女が卵から生まれてきたように見える。

「う、うっん」

ダンボールの中の少女が周りがうるさそうに声を上げる。

「あ、目を覚ましますよ」

瞼をピクピクさせる動作をする。

「やばっ！ どこか行きなさい、このクズ！」

智がドラコに吹っ飛ばされて宙に浮く。比喻ではなく本当に飛んで壁に叩きつけられる。

「へぶっ！」

智はそのまま目を回し意識を失う。

文哲の周りは、突然非日常な出来事ばかりで溢れてしまい夢かと思いたくなる。夢なら覚めろ……自分が今見ているのは現実ではありえないことばかりではないか。そうだろう？ 現実であれば少女が壁を壊して家に侵入してきたり、突然性犯罪者に仕立て上げられたり、人が物理的に宙を舞ったり、ましてやダンボールに梱包された少女なんて存在する訳がない。文哲は現実逃避に及ぶしかなかった。

「ふわああ……」

文哲は目を覚ました亜麻色の髪をした少女と目が合う。彼女は目が覚めたばかりで、まだぼんやりとした表情をしている。

「これで名実共に貴方は、この娘の父親ね」

ようは刷り込み……卵から目覚めた雛が最初にみたものを親と思い込む、ドラコはそれを狙っていた。だからドラコ自身が気に入った文哲はともかく、智が邪魔でだったので強引な方法でどかしたのであった。

啞然とする文哲を余所にドラコは、少女に話しかける。

「ほら、分かる？ 私が貴方のお母さんよ」

目に入れても痛くない……ドラコの少女を愛する気持ちは本物だ。あまりにも自己アピールに夢中になり、顔と顔の間の隙間がなくなるほど接近する。ドラコの手が何かを押し付けた。

「な、なんて、かわ……」

そこまで言ったところでドラコの台詞が消えた。

「なにをするの！あたしのお父さんにい……」

「今日は良く人が飛ぶなあ……」

ドラコは自身が作った大穴とは別の穴を開けて文哲の前からいなくなる。

亜麻色の少女は何が琴線に触れたのかその小さな手の平手により家外へとドラコを追いやったのであった。

「だいじょうぶ？ お父さん」

少女は心配そうにダンボール箱の中に入っていた先ほどドラコが押しつぶしたイルカのぬいぐるみを持ち上げる。

何かぬいぐるみに対して普通は呼ばない呼称を聞いた気がする。

そういえば……ドラコは刷り込みをしようとしていた。

「さすが、我が娘……すばらしい力だわ……」

ただの人間であればただの肉塊となつてともいえる勢いで飛んでいったドラコが血反吐を吐きながら4つん這いで顔を出す。

文哲は疑問を抱く。確かに卵から生まれた少女は、ぬいぐるみのイルカを父と呼んだ。

「なにを言ってるのかわからないの。だって……だって、あたしのお母さんはここにいるの」

少女は何のためらいも無く、ダンボールを指差した。

周囲を無音が支配する。気絶している者を除けば皆、ポカーンとせざる終えない。

「ちよつと、文哲……この娘何を言っているの？」

天上天下唯我独尊のドラコですら意味が分からなく文哲に尋ねる以外に方法がなかった。

凄くまぬけな説明になるが文哲は1つの考察を言う。

「もしかしたらだな……」

文哲は、昨晚に卵をダンボールに入れた。イルカのぬいぐるみも一緒にだ。その後文哲は、卵に何をするでもなく床についた。

すなわち、卵を温めたのはダンボール。それを支えたのがイルカのぬいぐるみとなる。彼女が卵から誕生したとして、最初に見たモノがダンボールとイルカ。

「な、何ということ……」

ドラコは絶望せざるを得なかった。

「自分で考察しておいてコレはハンカクサイという次元を超えて阿呆だと思っぞ。あのなあ……鳥の雛でも、もっとマシな本能を持ってるはずだ」

「お母さん、寒い中ずっと暖めてくれてありがとう」

白い少女は、ダンボールに頼ずりをする。

「わ、私のミレニウム・ラグーン……」

「だから、略されて困る名前を付けるのは止めろと」

そんな声も聞こえないのか、ドラコはこの世の終わりの様な顔をする。

「認めない、私。そんなの認めないわ……!!」

ドラコは目に涙を浮かべ走り出す。部屋の壁へと。

壁に新たな穴を開けてドラコは姿を消す。

3つの穴からガラガラと瓦礫が落ちる。

文哲にはこれが、自分の日常という名の今までの平穩に移り。それが崩れていく様をただ見つめるしかなかった。

「あ痛てて」

智が目を覚ましたのは、ドラコという名の天変地異が立ち去った後でのことだった。

文哲の家のリビングは、見るも無残な廃墟へと姿を変えていたの  
で智は大層驚いた。

「よ、よお……」

文哲は、目を覚ました智に乾いた笑みしか浮かべることが出来なかった。

「痛かったか、やっぱり痛いのか？」

「いやあ、そりゃあもう目が飛び出るかと思いましたよ」

「そうかあ、痛いのか」

文哲は残念がる。これで痛くないという回答を得られたのだとしたら夢オチという可能性も考えられたのだが。

「そういえば、黒い女の子はどうしたんです？」

文哲は答える気力もなくなただろつ目に空いた穴を指差す。

「あ、あなたたちも、あたしたちをいぢめるの？」

白い少女は文哲と智を見て脅える。

「えっと、誰です？ このさっきいた女の子の白いペンキかぶった版みたいな娘」

「亜種とか希少種とか言う何かじゃねえのか……」

文哲の言葉にはいまひとつ感情がこもっていない。

「だ、大丈夫だよ。えーと君は名前なんていうのかな？」

呆然とする文哲の変わりに、智が白い少女とコミュニケーションを図る。ただ、彼女を刺激しないように。ドラコとこの少女のやり取りの一部始終を見ていた訳ではないが、白と黒のコントラストが似てると思うのではなく、根本的に彼女とドラコが似ている存在だと智の本能は告げていた。だからこそ、あくまでも下手に……刺激しないように心がける。

「なまえ？」

「そう、僕達は君のことをなんて呼べばいいのかな？ ちなみに僕は智、この人は文哲さんっていうんだ」

「お母さん、あたしになまえってあるの？」

少女は物言わぬダンボールに話しかける。

ツッコミ症の智としては、口からハリセンが飛び出しそうになるだが、ここはあくまでもそーっと、そーっとしておかねば……。

「フミさん。この娘、名前ないみたいですよ。何かつけて上げて下さいよ。名前はその内、必要になりますって」

「……お前……なんだか楽しそうだな」

文哲はため息を1つ。

「じゃあ、玉子<sup>たまご</sup>」

「そ、それは女の子につけるにはちょっと……」

「タマタマ」

「悪化してますってば!!」

文哲は不安そうにしている少女を一瞥した。

「めんどくせえなあ玉希<sup>たまき</sup>! これなら問題ないだろう?」

ヤケクソ気味ではあるが、適当で且つ普通の名前をつける。

「うん、それならいいんじゃないですかね? どう、玉希ちゃんって呼んでいいかな?」

玉希と名づけられた少女はコクリと1つ頷いた。

「ふ、ふ、み……ふーちゃん?」

玉希は文哲を呼ぶ。

「なんだあ……」

ぶっきらぼうに答えた文哲に玉希はビクっとなるが、ダンボール箱からちょこんと顔をだすとニコッと笑顔を浮かべた。

「ったく……調子が狂いやがる」

文哲といえど、愛らしい笑みを浮かべられればどうすることも出来なかった。

「うん、うん、で僕は?」

「えっと……し、知らない人とはなしをしちゃいけないって……お母さんが……」

「酷くない? 僕の扱いだけ、何でこんなに酷いの?!」

ひいっと玉希は顔を引っ込める。

「コラコラ、サートシ君。子どもを虐めちゃいけないじゃないかあ」

「なんか嬉しそうですね」

「他人の不幸は蜜の味ってヤツだ」

文哲は、ニカアッと悪人顔を浮かべる。

「やっぱり、ロリコ……」

「とりあえず、部外者は出て行け!」

文哲は新聞記者を玄関まで追い詰めると、蹴り出した。

「さて……」

智を追い出した後に残るのは、玉希と名づけた少女だけである。

「なんか、こいつ調子狂うんだよなあ……」

暴力的に智を追い出したことで、玉希は再び脅えてしまっている。うるうる、とダンボール箱に入っていることから捨て犬を思わせる。

「だああああ！！ 分かった、置いてやるよ、置いてやるから」

文哲は玉希のそんな表情に負ける。

「ただし、いいか働かざるもの食うべからず、住むべからず。分かったか！」

「うん。これで家族3人路頭に迷わなくてすむの」

「っち」

文哲は何か玉希に負けたような気がした。

2人の奇妙な同居生活が始まった。

「フミちゃん。どうだい何とかかなりそうかい？」

文哲は島唯一の共同電話の修理をしていた。

「ああ。こんなのすぐ直るわ」

これが今日の仕事であった。

「そうかよかったよ。これで内地の息子に連絡が取れるよ」

島にはまずインフラが整備されていない。個人で電話を持つ者の2世帯ほど、テレビなど電波すら届かない。この国の技術は日々進歩を重ねてはいるがそれはまだ都市で起こっている話である。

「それにしても、フミちゃん家のタマちゃん。あの娘すごいねえ」

玉希本人は激しく否定するが、ドラコの娘、まあこれもドラコの自称ではあるが、伊達ではなかった。

さすがに家を修理する際に仮工事に木を使ったが玉希はそれを楽々1人で運んでしまった。さすがにこれは文哲も驚いた。

「いやあ、大助かりだよ。俺ら漁に出てる間に女子どもが出来ない力仕事を皆やつちまうんだからな」

おかげさまで、朝昼の唯一の男手であつた文哲はお役目御免。こうして、滅多に壊れることがない機械の修理作業といった、緻密な作業を必要とする仕事以外役割が回つてこない。

「それにしても、アンタやタマちゃんそしてあの新聞記者さんこの島にも目新しい人が増えたねえ」

島の人々も最近は外の者が来た程度で目くじらを立てなくなっている。これも3人の功績である。

「にしても、アイツまーだいるのか」

文哲は智を指す。島の中には智を嫌うものはほとんどもないが、文哲にとつて見れば早くこの島から出て行つて欲しい1人であつた。

「ふ~~~~ちゃーん!!」

遠くで玉希が手を振っている。臆病で人見知りが激しい玉希であつたが、島民達があまりにも玉希を猫可愛がりすることもあつて徐々にではあるがこの島の雰囲気に慣れつつあつた。

「それにしても、初めてフミちゃんがタマちゃん連れてるのを見たときは驚いたねえ」

「ああ。止めてくれ……その話はもう聞きたくない」

文哲は思い出しただけでもその時に味わつた突き刺さる視線に耐えられなくなる。

「そんなことする子には、見えなかつたのに……」

「とてもいい子だつたと思いますよ」

「普段から、あまり挨拶とかする子には見えなかつたねえ」

その時のご近所さんのコメントが脳裏にフラッシュバックした。

「いやいや、オレは何もやってない。オレは無実だ!」

「皆、そう言うんだよ、どうだカツ井食うか?」

多少脚色が入っているが完全に文哲が被告であつた。

「まあそう落ち込むやフミちゃん。だってあの娘あんな成りだろ」

男性は玉希の容姿を指して言う。

確かに、日本人離れした亜麻色の髪に人形のような容姿。それにし

ても、「こいつ実は人形なんだ！」あの時の文哲の弁明も悪かった。  
『やーねー、近頃の子は自分から女の子の友達も作れないなんて』  
『えっ、これ人形なんですか。こんなのを持つてる男の人いるんですか？ いや、その人に対してのちょっとコメントしにくいですね』  
『おお、ふみてつよ……そんなものにたよってしまうとはなにことだ……』

島の女性からの冷たい視線が突き刺さり、脳内でそんな言葉をぶつけられた気がした。

「ふーちゃん……どうしたの？」

近づいてきた玉希がまるで土下座をしている光景をみて不思議がる。

「触れてやるなタマちゃん……男には……漢には、泣きたい時だつてあるんだ」

「よくわからないの」

玉希が文哲を突くが反応がない。

「フーちゃん、フーちゃん」

徐々に突いていく力が強くなる。そのうち、突きはブスリと音がしそうなほど強くなる。

「痛て、痛て……あん、なんだ玉希が……」  
「たたく言っただろう。あれほど手加減しろと」

「だって、フーちゃん全然こたえてくれないの」

「あー悪かった、悪かった。何か用か？」

玉希は満面の笑みで言う。

「あのね、あのね……なんか、おっきな船がくるらしいの。あたしそれ、見にいききたいの」

文哲は思い出す。

「あーそうか今日は、商業船が来る日だったか」

商業船とは、大門島のように内地と直接的な繋がりが無い孤島の為に行商に来る船である。

（そついや、いろいろと頼んだモンも来るのか）



文哲が内地に注文した機材等も、その商業船で運ばれて来る手続きになつてゐる。

前は港から永峰邸まで運ぶのも一苦勞であつたが、今すぐそこに体のいい荷物運び要員がいる。

「まあそついう意味じゃ正解だつたかもしれんな」

「フーちゃん？」

「なんでもねえよ……行くぞ」

「うん」

文哲と玉希は港へ行くことにした。

## 卵の中身にご用心（後書き）

こんばんわ、呉璽立児です。

今回の話、きつと急に話の流れが変わったなあと思う人がいるかもしれません。ごめんなさい。当初から、このようなノリを目指してプロットを書いていたのですが、本編を書くにあたって、怪獣映画のノリを強くしすぎたかもしれません。ただ、ライトノベルとしては、2話、3話からようやく始まった感じがします。ヒロインの服装に至っては芸がありませんね……まあそこは私が好きだから！という一言に尽きます。

ようやく、ライトノベルとして始まった「ドラコ」です。これからもよろしく願います。

## GANBARU大地に立つ

「ホラよ。婆さん終わったぜ」

文哲は通称・電話婆さんと村人から言われている、この島唯一の公衆電話の番している老人に修理が終わった旨を知らせる。大都市では硬貨を入れるだけで電話が出来る公衆電話等もあるが、島では赤電と呼ばれる手回しダイヤルの赤い電話が置いてあり、金を渡して電話を掛ける必要がある。

「はいはい、どうもありがとう」

電話婆さんは丁寧にお辞儀をする。

玉希が文哲の袖を引っ張る。

「フーちゃん、フーちゃん早くいこうよ」

「わーってるからちよつと待て」

最後にモデムと呼ばれる端子を電話に挿す。

文哲が受話器も持ち上げ耳に当てると、ツーという音が聞こえた。

「よし」

「いこう、いこう!!」

「港に行くのかい？ どれ、お駄賃を上げよう」

電話婆さんは自分の財布を開くと、硬貨を3枚玉希に手渡す。

「ほら、礼ぐらい言えよ」

文哲が促すと、

「う、うん。おばあちゃん、ありがとう」

玉希は少し照れながらも控えめにそう言った。

「はいはい、どういたしまして。フミちゃんも……」

「オレはいいって。んな、子どもじゃねーんだし。ほれ行くぞ」

文哲は玉希の手を引いて立ち去る。

「あらあら、行っちゃったよ」

電話婆さんは、残念そうにそう言った。

「フミちゃんは大人だねえ。どう育ったらあんな若さで立派になっ

ちまうんだろうね。俺があれぐらいの時は、もつと馬鹿してたのに」  
「そういう、あんさんはこんな所で油を売ってても良いのかい？  
また奥さんにどやされるんじゃないかい？」

「そうだった、そうだった。婆ちゃんじゃあな」  
漁師も家へと引き返していった。

「子どもは子どもらしくしてればいいのにね……」  
電話婆さんは、文哲に渡そうとした硬貨を財布に戻した。

「フーちゃん、お金貰わなくてよかったの？」

「ああ、いいんだよ。お代は別な人から貰うことになってんだ」

お金というのは貰いすぎても与えすぎても、わだかまりが残る。  
だからこそ、何もしていないのにお金を貰うのは子どもだけがして  
いいことである。これは文哲の持論であった。

「ふーん、そうなんだ」

玉希はそう言うのと、先ほど電話婆さんから貰ったお小遣いを自分  
の財布にしまう。

「は？　なんでお前そんなに金持つてるんだ！？」

一瞬見えた財布の中身は、結構な額が入っているように見えた。

「お札まで……オレの財布の中身より入ってるじゃねえか」

玉希が稼いだ分のお金は、文哲に支払われることになっている。

本人が幼いということもあるし、何より宿代ということになっている。

「えへへ……。働いたらね、貰ったの」

「ったく、皆今は大変だって言うのに、コイツの外見に騙されすぎ  
だっつーの」

誰もが今、魚が取れなくて厳しい。漁師達は最近遠出をするよう  
になってようやく、魚が上がるようになったというが、それでも燃  
料代などを差し引くと取れないよりはマシとなった所であろう。そ  
れでもこうして玉希にお小遣いをくれるのは、ひとえに玉希が皆に  
愛されているからであろう。

これは1つの才能である。玉希は誰にでも愛されることが出来た。それは、玉希の特殊な力かもしれないし、彼女の容姿か性格の所為かもしれない。

玉希の影響は実に些細なことである。だがそれはこの島に変化するという機会を与えた。湖は周りから水が入ってこなければ澱む。変化というのは勝手に起こることではなく、新しく入ってくるモノが常に変化を促しているのかもしれない。

「おい。半分よこせ」

「やー」

玉希は財布を文哲から遠ざけ、文哲が近づけないように自身の片手で突っ張る。こうされると文哲は玉希には力では勝てないので、諦める以外の方法がない。

そうしている間に、外来船用の船着場まで到着する。ここに泊まる船は、連絡船とこの商業船だけである。

船着場や港には出店が出ている。

文哲は、荷物を取りに船に近づく。

「よう、社長」

「おお、フミちゃん」

この島に住んでからというもの、内地から物を運ぶ手段がこれしかないので文哲は顔が売れていた。

文哲が社長と呼ぶこの人物は、文哲の注文を島まで運んでくれる者であった。

「おい、持ってこい!」

「はい!」

社長に言われ荷物運びの船員は、船から1週間分の新聞と大きな箱を1個持ってくる。

「これご注文の品ね」

「はいよ。お代は……」

「ちゃんといつもの口座から引かせて貰ったよ」

「そうか」

文哲が買い物した分の代金は内地の大手銀行口座から引かれる手順になっていた。

「それにしても……テレビかい」

文哲が買った大きな箱の中身はテレビであった。

「こんなド田舎で映るのかい？」

「まあ……映らないわな」

「だったらどうして？」

「そこは、自分でなんとかするんだよ」

機械の改造、分解は文哲の得意分野である。研究所時代もこうして既存の機械から分解して実験機器の製作などもよく行っていた。

「はあ……やっぱリフミちゃんの言うことはよう分からんな」

文哲は荷物の受け取りにサインをする。

「今日はどうする？ リアカーとか持ってきてないみたいだけど」

「ああ、それはコイツに渡してくれ」

文哲は2人掛りで持ってきたテレビの箱を後ろに隠れている、玉希に渡すよう指示する。

「……わ、わたすの……」

「こりゃ、またけつたいな……お嬢ちゃん、これすごく重いよ」

「い、いいからわたすの」

どうせ持てないだろうと2人の船員は玉希の前にテレビの入った箱を置く。

玉希はそれをいとも簡単に持ち上げる。

「こ、こりゃあ……おつたまげた」

「ほい、サインな」

文哲はサインした紙を手渡す。

そして、新聞を持ち上げる。

「それじゃ、またな」

「あ、ああ」

社長と船員達は最後まで何度も瞬きをしていた。

文哲と玉希が港を歩く。何をせずとも目立つ玉希であるが、今日

は一段と目立っている。

「まあ、いたいけな少女に荷物持たせやがって」

「ヒューヒューお二人さん御暑いな」

「は、うるせえや!!」

漁師達は暇なのか、文哲をからかう。文哲もそれを分かっているようにやり過ごす。

「……フミちゃん、はやくいこうよお……」

玉希は、老人と女の人以外が苦手であった。

「そこのご兩人寄っていないかい？」

声を掛けたのは、出店の店主であった。出店といっても莫座ムクを引いて品物を並べているだけである。

「……あ……」

玉希はテレビの箱置いて、トテトテと近づいて行く。

「お、おい！」

玉希は、品物の一つを見つめる。

（つたく、なんだ？）

玉希がしゃがんで動かない。文哲は上から玉希の見つめているものを見る。

（これは……髪止めか……？）

それは花とブドウの装飾されたガラスで出来た髪止めであった。

「欲しいのか？」

「（コク……コク）」

玉希は声も出さずに頷く。

「兄さん、どうだい？ 買ってあげたら」

店主も商売上手である。うまく買わせようと文哲に言う。

物の買い方を知らない玉希は、どうやって手に入れたらいいのかわからないように見えた。

「じゃあねえな、いいか見てろよ」

文哲は、店主から値段を聞くと幾らか値切る。

「ちえ、兄さんには負けたよ、それで持ってきたな」

文哲は代金を店主に渡すと、品物を手に取る。

「あ！」

玉希は残念そうな声を上げる。髪止めを文哲に取り上げられてしまったと思った。

「分かったか？ こうやって物は買うんだ」

「……う、うん……」

買い方というものの理解できたが今回も意地悪な文哲に自分の欲しい物を取り上げられ、玉希の顔は影が射したままであった。

「ほれ、動くなよ」

文哲は玉希の顔を自分の方へと向けると、文哲から向かって右側の玉希の髪を摘む。そして買ったばかりの髪止めをパチンととして固定する。

「これでいいか」

男であるためイマイチ勝手は分からなかったが、文哲は髪止めを玉希に付けてやる。背格好とその髪型はミスマッチであるかもしれない、文哲はそう思った。

「あ、ありがとう」

だが、玉希の顔は満面の笑みであった。

「お、おう。用が済んだら行くぞ」

「うん！」

（ちえ、慣れねえことはするもんじゃねえな）

眩しい笑みを浮かべられてしまつては、意地の悪いこともいつてやれない。文哲は仕方がなく心の中で悪態をついた。

一方こちらは智。智は、文哲が港から立ち去った後にやってきた。

「へえ……こんな催物もあるんだ」

まるで出店が出ていて祭りのようだ、そう智は感じた。

だが、一つ違うことといえば、性別ごとにまるで集団が分かれているように見えることである。



女性は食料といった出店に集中している。対して男性は出店のないところにまとまって談笑している。家庭を持つ者はその荷物持ちとして、それ以外のものは暇つぶしとして来ている、といった所であらう。

智は、漁船沈没というスクープを掴みはしたが、まだ帰ることは出来ずにいた。本来の目的、大門島にいとされる天才科学者の所在を記事にするほど集めれていないからであつた。

（ただ、気になる人はいる……）

それは、永峰文哲という少年である。彼は本島から来た人間であつた。その年齢に対してどこか達観したものがあつて、洞察力、精神面1つ取つても彼が15歳というのは、智はとも思えなかつた。しかも、文哲は謎の船舶を所有していた。

（でもなあ、当時の軍属科学者つていつたら年齢を差し引いたら……フミさんの場合5、6年前と言つたら小学生の年齢になつちゃうんだよね……）

智のイメージからすると、科学者というからには若くても30歳、しかも相手は隠居していると予想していたことから60歳〜70歳ぐらいではないかと思つていた。

だが、この島に訪れた人物といえば文哲しかない。

智が考えうる一つの可能性は、文哲の知り合いで、しかも近しい両親や祖父母が対象の科学者なのではないかということである。その辺に探りを入れようとしても、文哲の家に訪れてもうまくかわされ追い出されてしまうし、最近に至つては外で会うことが無い。

島民から得られる情報には限りがある。これ以上の情報を得る為には智自身ある程度大きな行動に移るしかないだろう。

「はあ……」

智は自身の記者という職業が嫌になる。記者はあらゆる人々から情報を集めて間違いのない記事を書かなくてはいけない。中には、その記事の内容が当人が書いて欲しくないというものだってある。だからこそ記者は書き手に情が沸いてしまえば正確な記事を書くの

が難しくなる。

これは記者新人だからこそぶち当たる壁のようなものである。それでも、智は決心を固める。一人前の記者となる為に、たとえ人に嫌われようと皆に伝えなくてはいけない情報はある。智はそう考えている。

「おい。時任!!」

智は若者漁師達に呼ばれる。

「海城さん」

海城の集団は港の端の方で集団を作っていた。集まっているのは、未婚の男性ばかりである。

「今、島の娘で誰が一番可愛い話してんだよ。お前も参加しろよ」島の若者は婚期が早い。だからこそ未婚の若い男性達は、こうして日々誰が一番可愛いのか、嫁に欲しいか議論に議論を重ねていた。

「島水はどうだ？」

「ああ、確かにカワイイな」

「だけど、あそこの親父怖いんだよ」

「……確かに、顔見ただけでブン殴られそうだ」

これも何回もこういったやり取りされてはいるが、彼らは飽きずに何度も続けている。こんなこと続けても結婚出来る訳ではないのに良く続けるもんだと、智は思う。

「そっぴや、タマちゃんってどうだ……可愛くないか？」

「え、お前何言ってるんだ……」

「やっぱ駄目かあ。言うんじゃなかった……でも、あの娘数年したら絶対化けるぞ」

ロリコン趣味と言われるのが怖いのか、当人は慌てて取り繕う。

「いや、そっぴやねえよ」

仕切り屋の海城が言う。

「だよなあ……」

皆がうんうん頷く。

「だって、タマちゃんはフミちゃんの嫁だろ？」

「フミちゃんの嫁だな」

「うん、フミちゃんの嫁だ」

1名を除いて全会一致で確定する。

（あ、そういう認識になってるんだ）

智も玉希の事件に関わっていたので、ある程度の事情は理解していたが島人達はその思ってるんだ、と再認識する。

「え、あの2人って兄妹じゃないの？」

「馬鹿だなあ、アレが兄妹に見えるのか」

確かに容姿からは、2人が兄妹に見えることはまずないだろう。

「ふ、だが俺は分かるぜ……たとえば2人が兄妹だったとしてもあれは間違いなく恋仲だ」

海城がそう断言する。

「最近そついや、タマちゃんに似た女の子がフミちゃん家に通ってるっていうのは……」

「そりやもちろん三角関係だ。きっと毎日が修羅場だろう」

（まあ、確かに修羅場だけどね。物理的に）

智は文哲に同情する。家が一日で半壊するほどの少女達である。

智自身も酷い目にあつた。

「にしても、フミちゃんなんであんなにモテるんだ？」

「確かに……オラの分析では、今島の大半の女子はフミちゃんに熱い視線を送っていると見てる……」

こんな根暗なことばかりしてるから、彼女なんてできる訳ない……智はそうツツコミそうになったが、目の敵にされそうなので口にはしない。

「やっぱ今はもう塩臭い男はモテないのか!! そうなのか!!」  
漁師達は絶望する。

「……お取り込み中、申し訳ない」  
「はい？」

智は突然話しかけられる。相手は見たこともない女性であつた。商業船に乗ってきた人であろうか？ 智はそう思う。

「この島に、旧軍が建てた家があるはずなのだが心当たりないだろうか？」

（昔に軍が建てた家？）

智には心当たりがない。そういった情報は聞いたこともなかった。「すいません。僕、最近この島に来たばかりなので分らないです」

「そうか……他の者はどうだろう？ 心当たりないだろうか」  
女性は漁師達にも問う。

だが漁師達は皆、彼女に見惚れていた。

典型的な大和美人ともいえる、艶やかな髪、そしてなんとも言えないプロポーションが漁師達を魅了した。出るところは出て、引込むところは引込む……いわゆる、ボツキュボンというヤツだ。

「うん？ どうした」

女性は皆一同に固まっているので疑問に思い問いかけた。

「お、おう……軍の家つたら……フミちゃん家じゃねえの」

「え？ そうなんですか！？」

女性よりも智がその話に食いつく。

「そ、そう聞いたことがあるけど……」

智の反応に海城が驚く。

「悪いが誰か案内して貰えないだろうか……」

彼女の剣幕きつくなる。そんなことに気にせず皆、立候補しようとする。

「僕が行きます。さあ行きましょう」

だが一番最初に声を上げたのは、智であった。

「すまない。よろしく願います」

「チキシヨウ、時任死ね」、「悔しいのう」とかそんな声がした気がしたが無視して智は彼女を案内する。

港から離れ、漁村を歩いてる中で、

「先ほどはすまない、少し冷静さを欠いた」

彼女は反省した。

「いいですよ。そういえば、自己紹介まだでしたね。僕は時任智っ

「ていいます」

「私は黒木絵梨佳くろぎ えりかという。時任、今回は協力に感謝する」

変わった話し方のする女性だなと智は思う。まるで男のような作業着を着ている絵梨佳だが、その美貌を隠せる訳もなく、どうしても視線を集める。

「そういえば、時任。先ほどののが言っていたフミちゃんというのは何者なのだ？」

「永峰文哲っていう少年ですよ。何者かは僕もはっきりとは言えないんですけど。一応、良い人ですよ」

それが、智の評価だった。いつも、憎たらしく食えない発言が多いとは思うが、智に助け舟を出してくれたり、普通の人ならば追いつくであろうよく分からない少女を保護したりという（面倒見の）いい所も見せている。

「良い人であろうと見過ごすことは出来ないな」

絵梨佳はそう呟いた。

また、その頃港では智が去った後で、

「それにしても、またフミちゃんか……」

男たちが夕日に向かって吼えている姿が目撃されていた。

「とーちゃーく」

玉希は家を見てそう声を上げる。自分自身より重たい物を持っていた割にちつとも疲れてはいない。

「さつさと、中に運べ」

「はい」

玉希はここまでずっとニヤニヤが止まらない。髪止めを買って貰ったのがよっぽど嬉しかったのだらう。

「ふ、ふふふ」

突然笑い声が聞こえる。

「だ、だれ？」

玉希が問う。

「その問いに答えよう……」

無断で人の家から現れる何者か。

「……私はお前の母だ!!」

もちろん手加減なくドアを壊して現れる。

「龍子……いい加減にしろ!!　　なんと家を壊せば気が済むんだ!」  
「残念ながら、今の私は龍子でもドラコでもない……」

ドラコはいつもの様な服は着ていなかった。その仁王の様に立つ、雄雄しき姿は……

「私は、起動紙箱戦士 G A N B A R U!!」

どこから持ってきたのか首穴と腕穴を開けたダンボールを被っていた。そのダンボールの胸部分にはマジックで大きく『G A N B A R U』と大きく書かれていた。

「ハンカクセエ……いや大馬鹿か……」

その姿は中途半端という言葉すら付けることは出来なかった。変装とはとても言えない。ただ胸にダンボールを搭載しただけで、顔すら隠れていないのだから。

「さすがにそれぐらい……ハンカクサイ玉希でも……」

「お、お母さん……?」

馬鹿(の子)は馬鹿だった。

(コイツが、鳥よりハンカクサイのを忘れてた)

「おお、娘よ……」

「おかあさぁん!!　　しゃべれるようになっただね」

ドラコは感動の再開とも言いたいのか目に涙を浮かべていた。

「どうだ見たか?　私が本気を出せばざっとこんなものよ。どうこの魅力あふれるこの姿」

「ただ、ダンボール被ってるだけじゃねえか。普段の格好もけつただけ、今日のは一段とハンカクせえ」

「嗚呼、分かってないわ、文哲。この格好後30年後に流行るわ。普段着ているゴスロリ服も50年後には皆きつともてはやす。私に

はそんな未来が見えるわ」

ドラコはそう宣言する。

「フミさーん。お客人ですよー」

「次から次へと面倒臭せえ……」

遠くから、智がやってくるのが見える、隣には文哲の知らない人がいる。

「ああん、誰だてめえ」

「お前が、永峰文哲か……」

顔を鉢合わせた文哲と絵梨佳の間に険悪な雰囲気が漂う。

「ちょ、ちよつと！！ 知り合いじゃあ無いんですか！？」

こんな展開になるとも思わなかった智は戸惑う。

「やれーやれーふ・み・て・つ！！」

「フーちゃんがんばれ」

「ちよつと、煽らないでください！！」

唯一の常識人・智は仲裁に入るしかなかった。

なんとか、文哲の家で対話をすることを提案して、承諾させた。

智は寿命が20年は縮むかと思ったという。

## GANBARU大地に立つ（後書き）

こんばんわ、呉璽立児です。ラノベしてます青春してます。テイス  
トがかなり変わっていますが、ボケるときにはボケて、真面目なと  
きはひたすらシリアスそんなメリハリあるものを目指しています。

感想ご意見等ございましたら、よろしく願います。



## 天才科学者

「……………」

「……………」

2人の間にはバチバチと火花が散っている。

お互いに第一声を放つ雰囲気があるで感じられなかった。

「あ、あの……？」

その空気に耐えられなかったのはやはり智であった。

「黙ってる」

「黙れ」

「はい……」

智はしゅんと縮こまるしかなかった。

「で、アンタ誰だ？」

「我が国の男子なら自分から名乗らないか！？」

「あいにく、敵意むき出しのヤツに名乗る名前はないな」

話が一向に進まない。

「仕方ない……私は黒木絵梨佳」

「永峰文哲」

絵梨佳が先に折れてようやく半歩前進する。

「貴方を、軍備施設無断使用で拘束する！」

絵梨佳はとある任務の為にこの島を訪れた。だが、使用しようとしていた施設は文哲によって利用されていた。予備隊員である彼女がこの行動に出るのは当然であった。

「おう、やれるもんならやってみろ。恥かくのはテメエのほうだ！」

そして二人の仲は加速度的に悪くなる。

「こんな外国人の子どもを囲う為に使うなんて、言語道断」

「はっ！ 本当にそう見えるなら、いい眼医者紹介しようか、とびきりの頭のイかれてる知り合いの生物学者を紹介してやるよ」

「奇遇だな、私の知り合いにも天才と何とかは紙一重の生物学者がいる。紹介してやろう」

当に龍虎の戦い、お互いに引くつもりはない。

「埒が明かない。時任！！」

「は、はい！！」

「私を本島に連絡できる所に案内しろ。今すぐ、予備隊を呼び寄せてこの不届き者を拘束する」

「お前、本当に何モンだ？」

予備隊という言葉聞いて、文哲が問う。

「私は予備隊少佐……黒木絵梨佳だ」

絵梨佳は手帳を取り出し、自分の身分を明かす。

「なら、なおさらずに恥掻かせてやるよ」

文哲は、してやったり顔でいう。

「オイ、そのドア開けな」

そこには文哲秘蔵の品がある。

絵梨佳は渋々ドアを開ける。

「な、これは何だ……」

啞然とする。

そこには、絵梨佳が見るだけでも様々な通信機器が鎮座していた。電話、無線、モールス信号……更には彼女自身使い方が分からない機器すらある。

「通信内容を知られるわけにはいかないのですし、閉めさせてもらう」  
「好きにしろ」

文哲の顔は勝ち誇った顔になっている。

全くこれは、どういうことだろう。

絵梨佳は、目の前の機械を前に呆然とするしかない。こんなに沢山の通信機器まるで通信基地局のようだ。

「まさか……ヤツはスパイか」

いやでも、実質この国の軍とも言える予備隊員にこのような施設を貸すであろうか？

謎は深まるばかりである。

「盗聴されていないだろうな？」

機器を調べるも絵梨佳は機械に特別強い訳でもないので分からない。機器に強かったとしても無理だったかもしれない。今の絵梨佳は知らないが、ここにある全ての機器が文哲が暇つぶしで組上げたものであった。

「……まあ、秘匿通信を使うわけではない」

絵梨佳は数ある通信機器の中から電話を選ぶ。

「まさか、島について早々電話を貰うとは思わなかったよ」

電話の先は、絵梨佳の上司・草薙大佐だ。

「秘匿通信ではないので、手短に報告させてください。大門島に船1隻と数名の予備隊員を派遣してください」

「ほう、さすが黒木君。もう進展があったのかね？」

「いえ、そう言う訳ではないのですが……。そうですね、この情報は大丈夫でしょう。旧軍施設の家が謎の少年によって不法利用されています」

「謎というと？」

なるべく、早い話で増援を得ようとする絵梨佳に対して、草薙大佐は詳しく聞こうとする。

「大佐……。この通信は傍受されている可能性もあります。増援は何とかなりませんか？」

「そういわれてもだな……。これだけの情報では動かせん。もしかしたらその施設は譲渡されたという可能性だってある。なんにせよ、軍が予備隊に再編成されたことで書類に不備があったのかもしれない」

確かに文哲は自信満々であったことから、なんらかの手続きを踏んでいる可能性も否めない

「その少年の名前は聞いていないのか？」

「永峰文哲というそうです」

『少し待て……』

草薙は、絵梨佳との会話を一度置き別の電話を使って、情報収集を始める。

3分ほどすると、受話器から大きな声が聞こえた。

『……！？……本……か！』

何やら慌てているようである。

『黒木君……君は先ほどこれが傍受されている可能性があるといったね。まずそちらの今ある状況を聞かせてほしい』

「はい。今この電話を掛けている場所が、永峰文哲という少年がいる旧軍施設であります」

『なるほど……続けて聞こう。そこに永峰文哲氏以外の人間はいるか？』

「家の中に当人他3名いますが、電話を掛けている部屋とは別室にて待機させております」

『ならば大丈夫か』

草薙は一息置く。

『黒木君これは極めて重要な情報となる。心得て欲しい』

「はっ」

絵梨佳は電話先の草薙が余りにも嚴重に念を押すので思わず敬礼してしまいそうになる。

『君のお父上は旧軍にいたから聞いたことはないか？ なぜこの国が先の戦争の際に焦土にならなかったのか？』

先の戦争とは、6年前に終了した世界大戦のことである。この国は敗戦を認め、軍隊は解体された。そして今は自衛のみを目的とする、絵梨佳達が所属する予備隊というものが残されている。

「はい。聞いた覚えがあります。なんでも、当時最高峰ともいえる兵器を作った科学者がいてそれが抑止兵器となり、我が国は全面戦争となる前に条件降伏することができた」と

絵梨佳は父からこの話を聞いたとき感動した。そしてこの科学者

を英雄視した。

『うむ。そして、ここからが極秘情報となるのだがその科学者はその後消息を晦ました。これは当然であろう。当時のこの国は軍が解体されたということもあり、喉から手が出るほど欲しがる外国から彼の身を守ることが出来なかったからだ』

「大佐……私には何故その話を今おっしゃるのか理解できません」  
『私も今得た情報なのだが、どうやら間違いないらしい。その科学者とは当時9歳で軍属科学者として働いていた。名前を永峰文哲というそうだ』

（は？ 今大佐は何と言った？ 私の憧れであつた、科学者が……あの少年！？）

「たたたたたた、大佐そそそれは、まことの……まことのことでござるか？」

『黒木君、落ち着きたまえ』

あまりの動揺しすぎて唐突に武士言葉まで出てきてしまう。

『いいか黒木君。これは最大級の秘匿事項である。この情報が漏れれば、彼は余所の国に誘拐される可能性だってある。ましてや、君がその島を訪れた任務のこともある』

「は、はい！！ 漁船沈没事故が外国の潜水艦である可能性についてであります」

これは、とある新聞社から得た情報であつた。漁師の1人が潜水艦らしき物を見たということで、その事実確認として絵梨佳は大門島に訪れたのであつた。もちろんこの情報は新聞社との合意の元、記事にはなっていない。

『永峰氏がその島にいるということは、他国の潜水艦という話もあるが嘘ではないかもしれない。黒木君、君は永峰氏を保護しつつ情報収集に努めてくれ。もし、1人で手が負えなくなるなら最優先で増援を出そう』

「りよ、了解しました！！」

「文哲。ちょっと貴方部屋に入ってあの女殴つてきなさいよ」

絵梨佳が通信室に入った後、ドラコ……いやGANBARUは唐突にそんなことを言った。

「は、何言ってるんだお前。そんなことしてみろ、逆にオレが殴られるじゃねえか。相手は軍人みたいなものだぞ」

「何か嫌な予感がするのよ……まるで、貴方がイケナイモノを釣上げてしまったような。だから、今すぐに嫌われて来なさい!!」

「無茶苦茶だな龍子」

「龍子じゃないドラコよ!! もうなんと言ったら分かるのかしら。どうして貴方にはわからないの? このカッコよさが」

ダンボールを被った少女に言われても何の説得力も無い話である。

「ああ、この箱の所為ね。フッフ、再びその目に焼き付けなさい、このドラコのカッコよく雄雄しい姿を!!」

ドラコはGANBARUを脱ぎ捨てた。

「あ!」

「あーあ。ハンカクセエとは思ってたがここまでとは……」

智は驚き、文哲は頭を抑える。

「何ガツカリしてるのよ。もつと感動……」

「……おかあさん……じゃない……」

ドラコが首を回すと……。

「このうそつきー!!」

玉希がものすごい勢いで突進してくる。

「ひでぶー!!」

それはもうものすごい勢いで、仮作りの壁を壊してドラコは飛んでいく。

「今日も良く飛ぶなあ」

「わーいん。フーちゃああん」

勢いを人間が飛ばない程度に落とした玉希は、文哲に泣きつく。

「な、馴れたもんですね。てつきりフミさんも飛ばされるかと」

「そりゃあ……なあ……。オレがあんな力で飛ばされたら、すぐに血だまりだ」

文哲が玉希を撫でながらいう。

「それにしても、良く懷いたものですね……刷り込み失敗したっていうのに」

「なんでかなあ……不思議と懷かれっちまったんだよ」

ただ無下にも出来ずにいただけなのだが、脅えられずに好かれる対象となってしまった。

「見事なロリコンっぷりですね」

「今すぐその透かした顔をコイツに頼んでブツ飛してえ」

「ちよ、もちろん嘘ですよ。決まってるじゃないですか。もう、いい父親って感じですよ」

「この年で父親か……、玉希い」

「お、お兄ちゃんですよ。やだなあ、その年でお父さんとか思う訳ないじゃないですか。ハハハ」

ドラコの二の舞を演じる訳にならなくなかったので智は取り繕う。  
「……はあ……。オレはただ平穩に暮らしたいだけなのに、なんでこう次から次へと厄介ごとの方からやって来るかなあ」

漁船沈没事故から始まり、新聞記者、ドラコ、玉希　そして今度は予備隊員を名乗る絵梨佳の出現である。そして排他的であったこの島も変わりつつある。

文哲は、己だけが何もせず、己のやりたいようにするのも難しくなってきたように思えてしまう。文哲を中心に事態は……既に坂を大玉は転がり始めてしまったのだ。それを止める、もしくは大玉の方向を変えるには更に大きなアクションが必要となってしまう。

（ただ、誰にも気づかれず。平穩を繰り返してくれればな）

文哲が1度行動を起こしてしまえば、それは大きな波紋となり広がる。これは、過去に体験したことから悟ったことである。だからこそ文哲は大きな行動を起こさずに、周りに情が沸かないよう過ごしてきた。大切なモノを1度持ってしまうば……守る為に行動を起

こそうとすれば、守る以上に大きな傷を負わせてしまうかもしれない。それが、文哲が一番恐れていることであった。

ドアを開ける音がする。

「あ、通信終わったみたいですね」

渋谷というより、悪いことをして怒られる子どもの様に絵梨佳が姿を現す。

「はっ、その顔を見る限りどっちが正しいかは理解したようだな」

こういった皮肉も自分に近づく人間を減らそうとした結果、自然と口にするようになってしまった言葉使いである。

この言葉使いに怒って立ち去る、あわよくば島から出て行ってくれ、文哲はそう願う。

「……あの……その……」

絵梨佳はオドオドとしていて、先ほどの凛々しくも堅苦しいイメージはなかった。

「どうした？ さっきまでの権力を上から叩きつけてくる勢いはよ  
お」

文哲はわざと焚きつけるように言うが、彼女の様子は変わらない。

「申し訳ありませんでした！！」

「は？」

「え？」

その今にも土下座してしまいそうなほど、真摯に謝る絵梨佳の姿は文哲だけではなく智も目を丸くする。その姿は予備隊員・黒木絵梨佳の姿はなく、ただのごく普通の謝る少女・絵梨佳であった。

「本当に頭を下げる訳ではすまないことは分かっています。……永

峰さん、いや永峰氏……永峰様」

その姿を見ると、文哲は1つ気づいてしまう。

（コイツ、オレの正体を知りやがったか）

どういったルートを使ったかは分からない。ただ予備隊といえど、文哲の正体を知るものは多くは無い。知っていたとしても極秘情報……早々ばれるとは思っていなかった。



（クソ……過信しすぎたか）

文哲は、自分の安易な考えを悔やむ。

「是非、私に……いや、それでも不安に思っなら、隊員を増やします。貴方の身を保護させてください！！」

懇願する彼女の姿は、文哲に滑稽にすら見える。自分の情報を周知の事実にしたくはないが為に文哲は、1人でいることを決めた。

（それを守る……隊員を増やすだあ……）

文哲は自分自身の命など惜しくはない。文哲の頭の中にあるただ1つの悪しき設計図を守ることだけが、彼の使命であるのだ。

ここで予備隊員に守られるということは、つまり大事になつてしまふ。政府からすれば戦後の復興の為にこの国のエネルギー対策を行える文哲の存在は放って置けないかもしれない。

「……ふざけるな」

文哲は怒りを顕わにする。

「帰れ！！ 帰ってくれ！！」

いつもあつけらかんと憎まれ口を叩き、怒ったとしても気が抜けているようにも見て取れる、文哲からは見られないほどの剣幕であった。

文哲は、誰の顔も見たくない……。怒号の足音を立てながら文哲は、1人で地下の研究室に向かい鍵を閉めた。

（何が、フミさんをあそこまで怒らせたのだろう）

智は文哲の家を背後にそう思う。彼の隣には絵梨佳の姿がある。

絵梨佳は、見る影がないほどに落ち込んでいた。

（ただ、フミさんがただ者ではないということは確かなんだろうなあ）

もちろん智が絵梨佳に聞いても、彼女は口を閉ざすばかりで理由を話してくれる様子はない。

ただ予備隊……絵梨佳だけでなく大人数の隊までが積極的に動く

とすると、文哲が何か重要なポジションにいることは察しがつく。

智は真実に近づきつつあった。

「私は……」

「え？」

「ただ懂れていただけだ」

何をと聞く前に絵梨佳は口に出す。

「守りたいという者を守らずして、何が予備隊か！ 落ち込んでる場合ではない！！」

突然大声をだす絵梨佳に智は驚く。

「時任！」

「は、はい！！」

智はまるで絵梨佳の部下であるかのように返事をする。彼女の発言にはそれほどの勢いがあり、カリスマがあつた。

「今日聞いたことの中は、決して口にするな。忘れる！ いいな」

「りよ、了解しました」

新聞記者である智にそんなこと出来るはずもないが、嘘でもそう言わずにはいられなかった。

（こ、この人に僕が新聞記者だとは言つてはいけない）

文哲ではないが、身分を明かしてはいけない危機感に煽られる。

「うむ。では、私はここでお前とは別れる」

「ここでつて言つたつて、1本道……」

「さらばだ」

絵梨佳はそういうと、道から森へと足を進める。

智が声をかける前に、絵梨佳は森の奥へと姿を消してしまう。

それを智は呆然と見る眼めるだけしか出来なかった。

周りに光が無い 時刻は夜。

おなか……すいた……

街灯も無い山の中月明かりを1つ黒いモノが歩く。

おなか……すいた……

それは空腹であつた。

島に揚がつたのは、食べ物が無くなつたからという理由もあつた。でも実際はそれだけでもなく、守るべきものがそこにあり、そこで暮らしている小さなモノ達が面白かつた。それにまぎれて空腹も感じなかつた。

でも今は、

おなか……すいた……

頭が空腹以外の思考をしてはくれない。人間とは違うそれは、生きること、子孫を残すこと、そして、空腹を満たすこと以外の思慮を持つてはいないし、それ以外の考えを持つことはあつても本来の本能を抑える気はない。

だから、ただ獲物を探している。

おいしそうな……におい……

海に戻る気はなかつた。だつてそこにはもう獲物はいないから。すべて食べつくした。だから陸の上にいる。

あそこ………？

目の前には人間の建てた建物がある。沢山の獣の臭いを感じる。そこは、農耕の為の馬や牛、鶏卵の為の鶏や豚などが飼育されている小屋である。

アハハ

それは笑う。口から涎がこぼれる。厩舎の獣達は脅えている。本能的に近づいてくるモノから逃れようと。だが人間に使われている動物達は逃げることは出来ない。ただ迫り来る恐怖に脅えることしか出来ない。

じゃま

いとも簡単に厩舎の扉は壊れる。周りには食べ物沢山。後は口を開けて食べるだけである。獲物を捕らえる狩りも必要無く。目の前にはただ皿に盛り付けられたご馳走が並んでいるだけである。

おいしい

口から血が滴る。今まで海の獲物を追い回していたのが、嘘みたいに簡単にお腹が膨れる。嬉しい、とても嬉しかった。目の前の4つ足の獲物を掴んで口に入れる。ブモという断末魔と同時に口の中に味覚が広がる。

それが手を伸ばすごとに脆い厩舎は崩れる。元々、それが入るような大きさではない。1つ残らず食べ終わるまで厩舎の前を動かなかった。

轟音に気が付き厩舎を見に来た農夫がいた。

「や、山が厩舎を……牛を喰つとる……わああがあああ……!」  
その光景を見た農夫は、卒倒した。



## 天才科学者（後書き）

こんばんわ、呉璽立児です。物語も中盤、文哲の研究の重要性が明らかになってきました。

そして、アレも再登場しました。

次もおもしろくなるようにがんばって書きます。応援、よろしくお願いします。

## 大怪獣、現る

「うーん、うーん」

玉希は1人、漁村で首をかしげる。

「アレ？ タマちゃん」

玉希を見かけ声を掛けてくる人物がいる。

見覚えがあるが、名前が思いつかない。

「僕だよ、僕」

ボクボク詐欺かな？ 玉希は更に疑問を深める。

でも、見覚えがあると思う。玉希は頭を悩ますが、結局名前は思いつかない。

（わかった、アレはいつだったかな？）

「そうそう、何回も会ってるよね」

「くず」

いつだったか確かそう呼ばれた気がする。

「酷くない！？ 幾らなんでも、それはないでしょ！！」

「ひんっ！」

玉希は、怒鳴られ驚いてしまう。

「ああ。ゴメンゴメン。なんだか、フミさんの言うことも分かる気がするなあ。扱いづらい……」

目の前の男の人は、玉希に謝る。

「僕は時任智だよ」

「ときとお？」

玉希は口で反復するも、うまく言葉にできない。

「さとし、智」

「さとし！」

智に合わせて、玉希は名前を言う。

「そうそう。でタマちゃんはこんな所で1人でどうしたのかな？ 見たところフミさんもないみたいだけど」

玉希が1人でいることは珍しかった、いつもは文哲と一緒にいるし、それ以外の時は村人といえることが多かった。そのことが気になり智は玉希に話しかけた。

「んとね……フーちゃんきのうから元気、ないの」

玉希は昨日、智、絵梨佳が帰った後から文哲が研究室から出てこないことを心配していた。玉希にすると文哲は意地悪なことばかりするか、何もしないかの存在である。だが、文哲は昨日から玉希がまるでいないかのようにしていた。

「あたし、フーちゃんに何かしちやっただの？」

玉希の目には涙が映る。

「いや、違うよ！ タマちゃんの所為じゃないよ」

事情を知ってる智は、玉希を慰める。

「そうなの？」

「そうだよ」

「ならよかったの」

玉希は涙を擦りながらも笑顔に戻る。智は一安心とため息を付く。

「あのね、あのね。たまき、フーちゃんを元気にしてあげたいの」

「フミさんを元気にかあ」

玉希1人では、どうしたらいいのかまったく分からなかった。

問われた智も頭を悩ませる。

「正直難しいなあ」

事が事だけに、智には難題としか思えなかった。文哲を怒こらせた存在は彼を取り巻く新たな存在　絵梨佳である。

「文哲さんがどうしたとー！」

「わあああ！　ビックリした。って、黒木さんじゃないですか」

智の背後から絵梨佳が現れ、玉希、智共に驚く。

「いや、なについてそこから文哲さんと呼ぶ声がしたので駆けつけてみた」

絵梨佳はそう言い遠くの森を指差す。

「アンタは100メートル先に落ちた針の音をも聞き取るサイボー



グかなんかですか!!」

「こ、こわいひと……」

玉希は脅えていた。玉希の中では絵梨佳と文哲が言い合いをしていたので恐ろしい存在であると思った。

「こ、怖くなんてないぞお……ふふふ、ここで彼女と仲良くなれば、文哲さんとも仲良くなれる。ふふふ」

「絵梨佳さん、絵梨佳さん。考えが漏れてます」

智は絵梨佳が駄々漏れの欲望を口にしてしまっていることを苦言する。

「いや、実は時任。私も困っているのだ」

絵梨佳は顔を顰める。

「文哲さんがあれから一度しか私の前に姿を現さないのだ。これでは、文哲さんの素晴らしい姿を拝む……もとい、身を守ることが出来ないのだ」

絵梨佳の首には双眼鏡、カメラが掛かっている。さらに手には集音機のような物を持っていた。

「アンタはストーカーかなんかですか!？」

「そ、そんなことはない……私はあの人を守りたい。決して、私情などない、ないのだ!!」

絵梨佳はそう言いきるが、説得力はまるで無い。

「……それにしても、フミさんの機嫌をねえ」

玉希が期待を込めた視線で智を見つめる。

「そんな視線で見つめられても……あれ? それどうしたの」

智は玉希を見ると一つの変化に気が付く。それはブドウと花の髪止めであった。玉希は昨日から付けていたものであったが、智は今初めて気が付いた。

「これね、フーちゃんに買ってもらったの。えへへ」

玉希は嬉しそうにはにかむ。

「キー、羨ましい!!」

絵梨佳は悔しそうにハンカチを啜える。

「時任！！ この作戦に参加したならば…… そ、その文哲さんから贈り物をもらえるだろうか？」

「も、貰えるかもしれませんよ？」

絵梨佳の恐ろしいほどの剣幕から智は否定的な意見を出すことは出来ない。

「そ、そうか。貰えるのか？」

絵梨佳の顔がニタアと緩む。

「よし、その作戦。私も参加させてもらおう！！ あくまで私情ではない。これも任務の為だ」

「あまり大声を出さないでくださいよ。この娘、脅えているじゃないですか」

「おお、すまない。で、具体的にはどうするのだ？」

「それが、決まっていらないから頭を悩ませているんですよ」  
智はため息を付く。

「では、私が案を出そう。髪飾りのお返しなんていうのはどうだろう？」

「おかえし？」

「そうだ。お礼とも言つてな、物を頂いたら」ありがとう」と言う意味を込めて贈り物をするのだ」

絵梨佳はなるべく噛み砕いて玉希に意味を伝えようとするが、端々に難しい言葉が目立つ。

「つまり、タマちゃんがフミさんに”ありがとう”って言ってフミさんに何か上げればいいんだよ。絵梨佳さんいい考えじゃないですか」

絵梨佳どうだと言わんばかりに、そのたわわな胸を張る。

「問題は、何を送るかですよね……この島じゃ、贈り物を買う商店なんて無いでしょうし」

「あたし、あのね、あのね……ごはんつくりたいの！」

「ほう、弁当か悪くないな。女性が男性に送る贈り物といったら古今東西弁当と決まっている」

問題は、食材と本人の腕次第だろう。智はそう思う。素材はともかく問題は料理の腕に一抹の不安が残る。この生まれたばかりの少女にまともな料理の腕があるとはとても思えない。

「もちろん、この私も手を貸そう!!」

智の不安要素が1つ増える。

「その辺の家で尋ねれば、厨房を借りられるかもしれない」  
「ほんと?」

「ああ、本当だとも、さあ行こう!」

絵梨佳は下心丸出し、玉希は純粹無垢なだけに何を起こすかわからない。まるで、爆弾と火。今にも爆発を引き起こしそうな組み合わせに見えてしまう智であった。

「フーちゃん。開けてよお!!」

外が騒々しい。文哲は、研究室の中でそう思う。先ほどから玉希がドアの前で喚いているのである。

ドアを叩く音もだんだん強くなる。玉希は簡単にドアを壊してしまふ力がある。それだけに、この状況は喜ばしくない。

「つたく、なんだってんだ」

しぶしぶ文哲はドアの鍵を開ける。

「えへへ、フーちゃん、フーちゃん。ちよつときて」

玉希は文哲の顔を見ると、その手を掴んで階段を上がる。手加減はしていても文哲が振り払うことが出来ない力で家の外へと引っ張り出す。

外には智と絵梨佳も待機しており、文哲は顔を歪めた。

「みんなだね、ぴくにつくに行こうなの」

玉希はそう言う。

「ピクニック?」

文哲は乗り気でない。

「まあ、そう眉間に皺を寄せないでくださいよ。はい」

智が文哲にそう言って大きな箱を渡す。

「なんだコイツは？」

「あのね、みんなで作ったの！ おべんとう」

玉希は智と絵梨佳を指差す。

「わ、私はただ、文哲さんに是非とも元気になって頂きたいと思いまして……」

絵梨佳は文哲の前になると、ときまぎする。

「うんとね、うんとね。なんていうんだっけ？」

「お返し、だよ。タマちゃん」

言葉忘れてしまった玉希に、智が補足を加える。

「そう、おかえし！ これの」

玉希はお気に入り、昨日買ってもらった髪止めを大切そうに……そう言った。

「お、おう。そうか……」

ただそれだけのことで一喜する玉希を前にしたら文哲も先ほどまでの杞憂はどこかへといっけてしまいそうだった。

「だが、いいか！ 別にお前らのことなんかなんとも思ってたねえんだからな！！」

いつもの調子が文哲にようやく戻ってくる。

「はいはい。分かりましたから、行きましようよ。あそこの山なんて見晴らし良さそうじゃないですか」

「ったく、このお節介共めが……」

「フミさんには負けますよ」

智は悪戯っぽい顔をした。

「あ、あの、私も行ってよろしいのだろう……でしょうか？」

「好きにしろ。お前も作ったんだろ」

「は、はい！ 御供します。どこであろうと、地の果てまでも！」

絵梨佳が弁当箱を持って文哲達の後ろを歩く。

文哲達が目指したのは島を見渡せる、見渡し山の頂上であった。文哲の家が旧軍の家と言うこともあり、展望の為に見渡し頂上ま

では山道が通っている。

「ハア……ハア……」

一番最初にはてたのは文哲であった。

「なんですか……フミさん……意外と……体力、無いですね……」

……」

「デメエだつて……ばててる、じゃねえか……」

前に行く女性陣は、疲れることも無くさくさくと登っていく。

「オレは、インドア派なんだよ……」

軍人が登ることを前提とした険しい山道は手加減なしに真っ直ぐと急に上へと伸びている。

「まったくこれなら、別の道を使うんだった」

文哲が愚痴を言う。見渡し山の頂上へ行くにはもう1つ道がある。農畜を営んでいる者達の住む地域を抜けるなら道は緩かった。

「まったくだらしがないぞ！ あ、これは文哲さんに言ってるのではなく……時任に」

「っ！ あーもう止めた止めた。オレは腹が減った。ここで飯食うぞ！」

文哲は昨晚から何も食べてないので空腹だった。

「りよ、了解しました！！」

絵梨佳はすぐさまに文哲と智がいるとこまで降りてきて、重箱を開き始める。

「フーちゃんだらしないの」

「オメーらみたいな体力馬鹿じゃねえんだよ。オレは」

文哲は地べたに座る。

「お箸ですどうぞ」

「おお。サンキュ」

「いえいえ、そんなことで感謝されるなら、何膳でもお持ち下さい……」

絵梨佳は頬を染めながら更に3人分の箸を差し出す。

「いや、いらねえよ」

絵梨佳は残念そうに箸を引つ込めた。

「たまきの作ったの食べてほしいなの」

「いや、いや是非私のを！」

女性陣は自分の作ったオカズをそれぞれ進める。

重箱を開け、箸で取ろうとした瞬間文哲の動きが止まった。

1つ、とても料理とはいえない、ただの干物を作る為の生雑魚を切っただけの物

「えへへ」

玉希が微笑む。

2つ、見た目はとても綺麗な卵焼き。実に味もおいしそうな黄色である。ただ何故か『LOVE』と僅かに焦げ目を入れてあるもの。  
「そ、そんなに見ないで下さい。恥ずかしいです……実は小さい頃、花嫁修業の一環で料理を習ったことがあるんです」

沸騰しそうなほど顔を赤くする絵梨佳。

3つ、何の変哲もないただの白魚の佃煮。

箸を伸ばしても誰も顔色を変えない。

「あ、」

「え？」

文哲は佃煮を一掴みすると口に入れた。

「うん、何の変哲もない味だが旨いな。誰かに作ってもらったのか？」

女性陣は自分の料理を一番に食べてもらえなくガツカリとした表情を浮かべる。

「……それ、僕のです」

玉希と絵梨佳は殺気のコモった視線を智へと向ける。

「ふーん。何とも平凡なお前らしい料理だな」

文哲の感想も特に褒め称えるものではないが、それでも殺気は智を襲い続ける。智は息を潜める以外に殺気をから逃れる術はなかった。

そんな殺伐としたやりとりでも4人の行動は年相応であるかもし

れない。

文哲は孤独をあえて選んできたし、

智は人付き合いが苦手であった、

玉希は生まれたばかり、

絵梨佳は箱入り娘でエリートであつたので自分と似た年の友達との付き合いがあまりなかった。

4人ともこのような友達のようなことをしたのは、始めてもしくは久しぶりであつたのでそれぞれ楽しんでいた。

ちなみに、Love卵焼きは上品な味で美味しかった。生魚はそのままで食べるのは人間には無理があつたので、落ちている木を拾つて焚き火をして焼いて食べた。

皆が全く違つた境遇で、育つてきた環境も違う。知らない他人は畏怖することもあるが、知り合いになつてしまえば好感を抱くこともある。

ガサガサと風も吹いていないのに雑木林から草を揺らす音が聞こえる。

真つ先にそれに気が付いたのは絵梨佳であつた。

「誰だ！」

迫力のあるドスの聞いた声で林の奥を牽制する。

絵梨佳は他の3人の盾になるように、前に出る。

「人か。誰かいるのか？」

雑草を掻き分けて現れたのは、中年の男達3人組であつた。

文哲には僅かながら見覚えがあつた。

「確か、農畜やつてる……」

「森田だ」

男はそう名乗つた。

「あんた達こんなとこにいたら危ねえぞ」

鎌やピッチフォークという三本の針が付いた農具を持った男達が言つても説得力がなかった。

理由を聞くと森田は言う。

「熊が出たんだよ」

驚きの言葉が出る。小さな島に熊がいるのだという。

「いや、ありえねえだろ」

森といつても島の3分の1程度しか面積は無い。熊が生息するにはあまりにも食料が足りない。第一、熊と人間が共生できるほどの島は大きくは無い。

「……厩舎が壊されて、なかばやし中林んとこの家畜が全部殺られた。そんなことができるたら熊ぐらいなものだ」

農畜をやっている男達は総出で山狩をするのだという。

「私は、予備隊員の黒木だ」

絵梨佳は手帳を見せる。

「ありや、アンタ軍人さんかい」

「軍人じゃない予備隊員だ」

役割は似た様な物だが、言葉によって意味合いがまるで違ってくる。予備隊員としては間違ってほしくない一線である。

「軍じ、予備隊員さんがいるなら安心だ。なんとかしてくれよ」

「まずは、状況を見たい。山狩りをする前に現場に皆を集めて貰えるだろうか？」

「おう、まかせときな」

男達は来た道を戻る。

「文哲さん、申し訳ありません。私は彼らの事情を聞きに行きますので……」

「いや、気にする必要はねえよ」

文哲の言葉は、絵梨佳と始めて会った頃に比べると柔らかくなっていた。

「まあ、オレも行くつもりだし……お前も行くんだろ？」

文哲は智を見ていう。

「もちろん。事件ですからね」

それぞれがそれぞれの目的の為に、動く。

「でも、玉希ちゃんは……」



「心配するな、コイツは百獣の王より強い」  
絵梨佳にその意味は理解できなかったが、4人は現場へと足を進めた。

「確かにこれはヒデエな……」

文哲は厩舎を見てそう言わざるを得なかった。

厩舎は半分が壊されて無くなっていた。

だが、これが熊の仕業だというのは1つ疑問が浮かぶ。確かにこの国で恐れられる大型肉食獣といわれれば、熊だろう。厩舎のドアを壊した程度ならば文哲も疑問は抱かない。

しかし、厩舎はドアのある部分を前だとすると、前半分が文哲には押し潰されているように見えた。

厩舎の中も悲惨であった、家畜の血が飛び散り真っ赤になっていた。漂う汚臭が文哲の鼻を付く。

「これは、本当に熊の仕業か……？」

熊は確かに人より大きく恐ろしい生き物である。だが、積極的に他の動物を襲うほど気性が荒い生き物でもないはずである。もし気性が激しい熊がいたとしても、今まで被害が無く、存在も知られていないということは、どうやっても説明が付かない。

「文哲さん、危ないです。出てきてください」

絵梨佳が心配そうに声を掛けてきたので、外に出る。

話を聞くと、森田達は中林の家族に昨晩から中林が戻らないというのを聞いて探しに来たのだという。来てみれば、中林が厩舎のだいぶ前で倒れており遠目で見ると厩舎は半壊していた。

中林を急いで、彼の家へと連れ帰り事情を聞いたのだという。彼の話から熊が現れたと感ずいた森田達は武器に成りそうな物を手に取り森へと出た。

森田達もいざこうして近くで見ると現場の悲惨さを痛感する。

絵梨佳を中心に農耕を営む森田が呼びかけて集まった男達が10

人ほど話をしている。

「……今から、私以外の予備隊を呼ぶとしても、時間が掛かる」

絵梨佳も惨状から慎重にならざるを得ないようである。悔しそうに唇を噛んでいる。

問題は今度獣が現れた時に、村を襲うかということである。

「俺たちで、やるっきゃないか」

予備隊という戦力が今すぐ来ることはない、と絵梨佳伝えていた。それにより動けるのはこの島にいる男達のみである。

守るべき者がある男達は、決心する。

「では、私が指揮を取る。皆決して無理はするな」

絵梨佳は村人達に念を押す。人々の為に命をかけるのは彼らの仕事ではない、予備隊の仕事である。だからといって、人里に家畜を喰い散らかすような獣を野放しにする訳にはいかない。

「嫌な天気になってきやがった……」

文哲が天気の変化に気がつく。

先ほどまで快晴であった空が陰り始める。黒い雲が日差しを隠し始めた。雨雲なのか湿気と呼び妙に肌がベトつく。

ざわざわと木の葉が擦り合わさるような音が聞こえる。

ギアア、ギアアと沢山の野鳥が鳴き声を上げる。

それと呼応するかのように、野鳥の群れが森から飛び立つ。

なんとも嫌な雰囲気漂う。男達も顔を見合わせ不安気な顔を浮かべる。

「では、行くぞ」

絵梨佳は不安を断ち切るように先導を切って皆を鼓舞する。智、

文哲、玉希が最後に続く。

見渡し山頂上を目指す山道は、文哲の家から直線に伸びる道より緩い。誰でも登れるように、道がいくつもの緩い曲がり道になっているからである。そのおかげか森を見渡すことが出来る。

絵梨佳は無闇に森を掻き分けるのではなく、道が付いている山道から森を調査することを提案した。武器もない、村人達で獣を探す

のは無謀であると判断した為である。

提案を受けて、それでは熊が見つからない、と反論していた男達も今は何も言わない。天気の変化は、人々の感情までも変化させたのか、誰もが曇り顔を浮かべていた。

それぞれが森の中を注視し、獣を見逃さないよう必死である。

「おい……」

「っ！ いきなり声を出すな、ビックリするだろう」

西の方を見ていた男が声を出し、隣にいた気を張りすぎている者が驚く。

「……あんな所に丘なんてあったか？」

「丘？ おい、丘なんてどうでもいいだろう。俺達が探しているのは熊だ」

皆の視線が男の指差す方へと向く。森の奥、少し開けた所に盛り上がった丘の様な物が目に移る。

「変だな、俺も見覚えがないぞ」

誰もがいつも森の奥を観察して見ている訳ではないが、疑問の聲が沸く。

「土砂崩れでも起きて出来たんじゃねえの？ ほら、草も木も生えてないし」

怪奇の丘は黒く映る。

「おい、近づいてみよう」

男達の興味は丘へと向く

「おい、待て！ 勝手に動くな」

絵梨佳の静止も聞かずに、男達は丘へと草木を掻き分け進んでいく。

追いかける絵梨佳に続いて、文哲達も進む。

「おい、妙じゃねえか……？」

文哲は違和感を覚える。

「何がです？」

森が開けた所に出ると智が聞いた。

「この木……随分前に倒れたようには見えねえ。昨日今日に薙ぎ倒された物だ」

文哲が木の切り口を見れば、それはまだ乾いていなかった。広場の周囲を見ると、無残に倒された木がいたる所に見えた。丘を中心に円形状……いや良く見れば違う。まるで道の様になっている。

そして道の先には、建物がある。

（まさか！ あれはさっきの厩舎……）

壊れていない後ろ側から伸びる道、その先にある怪奇の丘。

（何故、周囲をきちんと確認しなかった　！）

文哲が後悔の念を押すと同時に

「おい　あれ……見ろ！！」

森田が声を上げた。

怪奇の丘　違う、丘に見えたソレは生き物だ。

人の気配に気が付いたのか生き物　いや怪奇の獣、怪獣と呼んだ方がいいのかもしれない。怪獣は立ち上がる。

丘が黒いと思った理由、それは怪獣が被っているその黒い体毛の所為であった。怪獣は4足歩行であったがその体高は推定10メートルほどと大きい。

>>GUWOOOOOO<<

怪獣は威嚇するかのように立ち上がり咆哮する。

「ひ、ばばは化け物おー！！」

「逃げろおー！！」

男達は怪獣が作ったと思われる、獣道を使って逃げようと　文哲達目掛けて走ってくる。他の者達に気を使うことは出来ない、体当たりされるかのように、文哲、智、玉希は弾き飛ばされる。

怪獣の顔色とでもいうのだろうか……逃げた男達を追いかけるかのように怪獣が前進を始める。

「おい！ 森まで戻れ！」

絵梨佳が声を上げ、文哲達は森の草陰に頭を潜める。

怪獣が歩く度にズシン……ズシンと振動が伝わってくる。横から見ると怪獣の風貌が良く分かる。怪獣は熊の様な4足歩行である。前足と後足の形は違い、前足は爪が鋭く攻撃的な形をしている。それに比べて後足は、その巨体を動かす為に太い。一見すると体格は哺乳類のようにも見える。だが顔はソレとは違っていた。顔はいかにも獰猛そうな流線型の形をしていて哺乳類と違いはつきりとした耳が付かない。もしかしたら剛毛が無ければ、大きな爬虫類恐竜のような顔をしているのかもしれない。哺乳類の尾がバランスを取る、また社会的シグナルを出す為ならば、怪獣には太く長い尻尾があるのはなんの為であろうか。

恐竜の様な顔、熊のような体格、姿勢、そして巨大な尾。この推定10メートルの怪獣は地球上で誰も見たことのない風格をしていた。

「この先には人家が……！」

身を隠し怪獣の恐怖をやり過ごした絵梨佳であったが、すぐに島の人々に危険が及ぶ。

怪獣は男達を追いかけ人里へと近づいていく。  
「厩舎のほうに真っ直ぐ行け、近くに櫓がある。そこの警鐘を鳴らせば危ぶないってことが伝わるはずだ」

文哲は絵梨佳に警鐘を鳴らすよう指示をする。元々、櫓は山火事等の災害対策についていた。港町に危機を知らすにはもってこいである。

「感謝します」

絵梨佳は駆け出す。

不幸中の幸いかも知れない。どうやら怪獣の移動速度は巨体の為に遅いようである。だからこそ、1歩、1歩が大きい。幸い速度は、人間が全力で走るよりは遅いようである。

「ふ、フミさん……あれなんですか、何なんですか……」

智は啞然としながら言う。

「わからねえ……」

文哲はただそう呟いた。

「……うつうつ……」

玉希が白い服を土で汚し蹲っている。文哲は玉希を背負うと歩く。

「い、行くんですか」

「このまま、ここにいたって仕方ないじゃねえか」

>>GYAAAAAN      WOOUN<<

怪獣の咆哮が再び聞こえた。

ガン、ガン、ガン

山の櫓の警鐘がなる。漁村の人々が高台に上った海原うみはらは山の方を見ると黒く大きなものがこちらへと向かってくるのが見た。

「何だ！！ アレは……」

>>GUWOON<<

怪獣はゆっくりと動きながらも、山で見かけた男達を追い詰めていく。

ゆっくりとした動きではあるが、人間に追いつくには決して遅くは無い速度であった。

「うおおー！！」

後ろを確認して走っていた所為か集団の中の1人が躓いて転ぶ。

「た、助けてくれー！！」

助けようと止まる者もいるが、既に遅かった。

怪獣は狙い済ましたかのように、前足を男に叩きつけ踏み潰す。

「うわあああああー！！」

生き残った男達が悲鳴を上げる。その行動から、自分達が狙われていることが明らかとなった。

熊を退治しようと島の為に集まった男達であったが、熊以上の恐怖に自分達がどこに向かっているのかも理解していなかった。気が付けば男達は自分達が住む 守るべき者たちが住む集落へと自ら逃げてきてしまっていた。

「お、俺の家が――！」

怪獣は意図も簡単に建物を粉碎する。怪獣からすれば障害にもならない。まるで砂の建物を壊すように歩いているだけである。

人間からすれば阿鼻叫喚の地獄絵図である。抵抗することは出来ずにただ逃げることしか出来ない。

男達が逃げれば逃げるほど被害は広がる。漁村まで来ると、村といえど建物が多い為、怪獣の4足歩行の視界では見つけられなくなる。

怪獣は勢いをつけると尻尾を支えに立ち上がる。怪獣の目の位置が高くなり、周りをギョロギョロと見渡す。

>> WOOOON      GYAAAN<<

怪獣は1つ鳴き声を上げる。人間が耳を抑えなければ耐えられないほどの大きな声であった。

目的を果たしたのか、諦めたのか怪獣は海を目指し始める。いくつもの建物を避けるでもなく、踏み潰して 一直線上に海を目指す。

こうして怪獣は、悪夢のような現実を人間に見せ付けた。

## 大怪獣、現る（後書き）

帰ってきました！！ ドラコ新話です、お待たせしました。

今回はとうとう、怪獣が大暴れました。頑張りましたので好評をいただけると嬉しいです。

話も佳境を迎えました。ここから終わりに向かって突っ走って行きたいと思います。



## 被害

巨大生物が大門島に現れて、一夜がたった。男たちが総出で瓦礫を撤去するとし、被害が露わとなったる。

死者2名、行方不明者4名、負傷者12名、損壊建物15棟

勘定をするならば、台風が通り過ぎたより軽傷ともいえる。

だが、山から海へと伸びる瓦礫の道は昨日の恐怖を思い出させるには十分であった。

2隻の護衛艦が大門島の港へと着岸する。予備隊が所持する楽古<sup>らくこ</sup>と利別<sup>としべつ</sup>である。

この船には、下位の予備隊員の他に司令官として草薙大佐、そして意見を求める専門家として生物学者の河内未樹が呼ばれていた。

「これがすべてその”巨大生物”の仕業だというのか 信じられん」

「ですが、一私 わたくし は、見ました。あの化け物を……」

絵梨佳はこの席に同席していた。

「だが……河内君はどう思うかね」

草薙大佐は未樹へと意見を求める。

「まだはつきりと見た訳ではないから、はつきりとは言えない……ただこんなことができる存在がいるとしたら 人間だけよ」

「未樹……」

絵梨佳と未樹は旧知の仲である。そんな未樹にまで自分の見たものを否定され絵梨佳の頭に血が上る。

「この程度で怒らない……まったく」

未樹はため息をつく。

「あくまでこれは今までの生物学的な私見に基づいての意見よ。この世に今だ発見されていない生物なんてごまんというわ。生きた化石、UMA、突然変異、宇宙生物 ？ アナタが見たのがそういうモノだということも十分あり得るじゃない。それを研究するため

にのワタシが居るんじゃないの」

未樹は嬉々蘭々と語る。

「……まったく天才というのはよく分からんな。君のような人間を招いたのは失敗だったかもしれない」

草薙はそう淡々という。

「アラ、大して検分もせず意見求めたのはそっちじゃない。ソレにお生憎様、ワタシは天才なんかじゃないわ 才能があるだけよ」

未樹は”オ”があるだけで”天才”であるとは言わない。彼女は今15歳である。少女と呼べるその年齢で彼女はその分野のトップに立った。決して、謙遜している訳でもないし、彼女は言いたいことははっきりと言う。つまり自分に”オ”があることを自覚し誇っている。そんな未樹だからこそ理解している。分野は違っても、”天才”と”オ”の間にある大きな壁を知っていた。

未樹は僅か15歳で大人を完封した。自分の意見が若造だからと周囲の者に否定されるのは、いつものことである。もし否定されるならば、否定したものを完全論破する為の材料を自分で集めるだけである。

草薙に言った通り現場を見に来ていた。

「ココがそうなのね」

未樹は現場を見ながらいう。その表情に災害被害者を労わるような表情は、一切ない。

未樹の身長は絵梨佳と並べばまるで妹と姉に見えるかもしれない。決して低いとは言えないが平均男性と同じぐらいの170センチほどの絵梨佳と比べてしまえばそれより頭1つ小さい未樹はそう見えてしまっても仕方がないかもしれない。未樹の服装は無理やり男性用の白衣を着ている為にダボダボ。そして、度の入っていないメガネ、そして乱れた髪を無理やり両脇に2本に分けている。格好だけ取ると言ってしまうえば大人なのか子どものかは、はっきりとしない。

「未樹。もう少し周りに気を……」

絵梨佳は、未樹があまりにも嬉しそうに観察するので自粛を求めた。

「いつも言ってるじゃない。アナタはすぐに情を持ちすぎるのよ。だからすぐに冷静さを失う。ワタシはこの状況を見ても何も思わないわ」

絵梨佳は未樹があまりにも場違いなことを言うので焦り周りを見渡す。幸いして誰も絵梨佳達を構ってはいないようであった。

「情に流されれば大事を失う。アナタも彼を見ればわかるでしょう？　すべてを見失った彼はこうして何も無い場所でやるべきこともせずにくすぶっている。彼は本来ココにいるべき存在ではない」

未樹は特定の人物を指して言う。

「未樹！！　それは違う！」

「ハイハイ、アナタが彼を崇拜しているのは知っているわ」

未樹は絵梨佳の言い分にはまったく耳を貸さない。絵梨佳はこの少女との論争で勝てた試しがない。

「計器いくつか持ってきているわよね。ガイガーカウンターを持ってきた」

未樹はガイガーカウンター　放射能を図る機器を持ってくるよう指示する。

ふてくされながらも絵梨佳は指示通り、ガイガーカウンターを未樹に渡す。

未樹が怪獣の足跡にガイガーカウンターの筒状の部分を向ける。

放射能が特定された場合スピーカー部分から音が出る。

「……放射能は無し」と

未樹は用紙に簡単に記入する。

その後いくつかの計器を試してみるも反応は無い。

絵梨佳は最後の機械を用意する。変わった機械であった。まるでそれは様々な機械を繋ぎあわせて作られたようである。

「まあ一応コレも試してみましょう」

計器を近づけると、未樹しか分からないが計器が反応を示した。

「……ふん、コレが反応示すんだ」

未樹にもこれが何を測定するのかは分からない。ただ一つ確かなのはこの測定機を開発した人間が永峰文哲であるということだけであつた。

「……………」

文哲は無言で漁村を見つめる。

文哲の家は漁村より高くなっているので被害が目に見えて分かる。だが、文哲はなにもしない。

「こんにちわ、文哲」

文哲に声をかける人物が1人いる。

「龍子か……」

「龍子じゃなくてドラコよ　全く、貴方には何回言っても無駄ね」  
ドラコは文哲の隣に歩いてくる。

「何を見てたのかしら？」

ドラコも文哲に習うように漁村を眺める。

文哲の視線の先には無残に壊された漁村が広がっている。

「人間ってこんなにも弱いよね、驚いたわ。その割にどうしてこんなに数が多いのかしら？」

ドラコはそう言う。

何回も非人間的な力を見せてきた彼女が文哲には今、あの黒い獣に見えた。

「まるで自分が壊して来た様な言い振りだな」

カマをかける。この考えが非科学的なことは文哲にも分かっている。馬鹿げた考えだと嘲笑する。

「あら、実際その通りじゃない」

だが返ってきた言葉は、文哲の考えを肯定するものであつた。科学者としてありえないと否定するのは簡単なことである。もし、頭

の固い学者ならば頑なに存在を認めないであろう。だが、文哲はドラコの人間としてはありえない一面も知っている。

「凄かったでしょ、私の力。まあ人間が弱かったってただけだけど」  
ドラコが力を出せば、文哲などすぐに踏み潰されてしまう。そんな状況が理解出来たとしても恐怖よりも知的好奇心の方が湧いてくる。まして相手は意思疎通の出来る人間以外の生き物である。

「お前は一体なんなんだ」

「私は私よ。ドラコ　”今”この世界で一番強い生物。だからこの世界で一番繁栄している生き物が人間だったとしても遠慮はしない。だってそうでしょ？　この世は弱肉強食。私を邪魔をするものがあれば全て倒す」

これは人間に対する宣戦布告とも取れる。ドラコは人間ではないいや人間じゃないからこそ人間の常識は通用しないのだ。ドラコはただ動物的に行動しており、人間のように支配欲等は無いのかも知れない。

「お前は何故人の形をしているんだ？」

まるで童話ようなやり取りである。文哲を食べる為よ、と言われればひとたまりもないだろう。

「それはね……、文哲に好かれる為よ」

「オレに？」

それはそれで疑問が浮かぶ。

「私自身にも良く分らないわ。ただ、貴方に好かれなくてはいけない　どうしてもそう思ってしまうのよ」

「お前が、人間でないということは玉希も」

「もちろん、私と同じ存在よ」

「ということは、玉希にもお前の様な姿があるのか」

もしそうだとすれば、人間と共生することは難しい。本人の意思とは別に玉希は過酷な状況に置かれるかもしれない。人間は自分と全く違う存在を極端に畏怖する。違う者を阻害し差別を生む。

「玉希に私の様な姿があるかは分からない。見る限りあの娘は生ま

れた時からあの姿だったように見えただけ」

結局の所、ドラコの意見だけでは問題は解決しない。

ドラコは怪獣であり、彼女の意思1つで災害が生まれるかもしれない。そして、ドラコより人間に近い所にいる玉希は正体がばれることがあれば、人間の迫害の対象になるかも知れない。

玉希は最近ようやく文哲以外の人間との交友関係を持てるようになった。そんな玉希が人間から迫害されれば耐えられるはずが無い。最悪の場合、第2のドラコと化すかもしれない。

「お前は、人間と共生するつもりは無いんだな」

文哲は確認の意味を込めて尋ねる。

「当たり前じゃない。何故弱いモノに気を使わなくてはならないの？ 私は食べたい時にモノを食べるし、私の気を害するモノがあればそれを殺すわ」

ドラコの宣言は、人間に対する宣戦。もし、人間に対抗する手段が無いならば無残にも殺すことを意味する。

そんな状況に置かれても文哲の出す結論はただ1つだけである。

「オレはどんな状況に置かれても何もしない」

それが正しい選択であると心に決めている。

「そう……」

ドラコは感情が籠ってはいない、もしくは憂いともいえる表情でそう言い文哲の前を後にした。

文哲は動かない。何があっても自分が発見したあのエネルギーを人間に使わせる気はない。自分が未熟であるがために勝手に軍に使われた。しかも、よりにもよって兵器にも流用されてしまった。人は強い力を持つ物をすぐに兵器にしようとする。それが科学者の意図と別であったとしてもだ。

だから文哲は絶対にそれを許さない。設計図は誰にも渡さない。もし強制されたとしても命を賭してでも頭の中にある設計図も共にを破棄する覚悟がある。それが僅か15歳の文哲が持っている覚悟である。自分の開発したエネルギー　　アウターエナジー　　同士に

よって戦争をさせる訳にはいかない。

そのエネルギーを発見したのはあくまで偶然であった。文哲が後に”ホール”と呼ぶ物からは未知のエネルギーが大量に噴出していた。文哲はこのエネルギーを得たいの知れない外側から流れ出るエネルギーと称した。アウトエナジーは不思議なエネルギーであった。小さなホールであっても、石炭、石油を越える発電を可能とした。それだけでなく、火を起こすことすら可能であった。

文哲が測定器を作り観測したところ、アウトエナジーは厳密に言えば未知のエネルギーではあったが、地球上に全く存在しないモノではなかった。ホール以外からでも非常に微量ではあるが観測することが出来た。

これはあくまでも仮説ではあるが、文哲は宇宙空間以外にも別の空間と言う概念が存在し、アウトエナジーはそこから降り注ぐものではないかと。だとするならば、ホールはその空間の裂け目であると定義付けることが出来た。

当時の文哲は、悪用されるとも知らずエネルギー不足を抱えてた国にホールを生み出す機構を持つ装置を2つ提供した。それは文哲独自の解釈、によって解析不可能な機構　ブラックボックスと化していた。1つは神無島の実験エネルギー駆動施設として使われ、もう1つは　兵器として使われた。しかも、アウトエナジーを持ちいたものではなく既存のエネルギーを使ってホールを作成する機構をオーバーロードさせた物であった。ホール　穴と言うだけあってその兵器は海上の敵大隊を飲み込み消滅させた。文哲はこの結果を見て啞然とするしかなかった。人を救う為に開発した機構が人を殺す為に使われた。それだけではない、発見した新エネルギーではなくホールを空けることを悪用されたことも文哲はショックを隠せなかった。もし使用されたのが、アウトエナジーならば文哲自身にも良く分らない力……開き直りも出来たかもしれない。だが、兵器に用いられたのがホールを生み出す機械機工なら話は別だ。

これは既存のエネルギーを使い文哲自身作り上げた理論を用いている。自分自身の手で作りあげたものが、兵器に使われたことは文哲にとって悲痛であり、許容できるものではなかった。そして、安易に技術提供を行ってしまったことを激しく後悔した。

文哲の意図とは別に、国を焦土となることなく戦争を終結させた彼は英雄と称された。科学技術で最先端を行く敵国が開発したエネルギーよりも汚染が全くなき、エネルギー変換効率も上を行く。そう持て囃<sup>はや</sup>される中、文哲はこの悪魔の設計図を消滅させるしかない。そう考えるようになった。

文哲はドラコがいなくなった後も立ち尽くしていた。

そこに2人の人物が尋ねてくる。それは絵梨佳と未樹の2人であった。

「ハア、イ、文ちゃん元気にしてた？」

未樹はそう親しげに文哲に語りかけてきた。



## 被害（後書き）

お待たせしました、新話です。

この後は、終わりに向かって突き進んでいきます。最後まで応援よろしくお願いします。

## アウターエナジー

「ハア、イ、文ちゃん元気にしてた？」

そう話しかけてきたのは、旧知の知り合い河内未樹<sup>かわうちみき</sup>であった。文哲と未樹は年少の頃から共に”天才”として軍に徴用されていた。年も同じと言うことで互いに研究に徹するまでは共に過ごすことが多かった。

文哲の認識する未樹は、好奇心旺盛で怖いもの知らず　文哲の苦手とする存在であった。

「なんで、テメエがここにいるんだ」

「イヤ、もう文ちゃん。ずいぶん言葉じゃない……別に遊びで来てるんじゃないわよ。もう、ほら　」

そう言つて未樹は、身分証を取り出す。そこには、予備隊の専門家として招かれた”オブザーバー”として未樹の名前が書いてあった。

「お前が予備隊に専門家としてねえ」

「どっかの誰かさんとは違って、私は今も生物学のトップにいるからねえ」

未樹は文哲に皮肉で返す。未樹は文哲が科学者を辞めた後も”才”と努力で誰にでも認められる地位まで上り詰めていた。

「でもやっぱり老害つてのはどこにでもいるのよねえ」

そういつてため息をこぼす。隣にいた絵梨佳のこめかみがピクと動いたが、彼女は何も言わない。

「で、この島に来たのがお遊びでないっていうなら、何しに来たんだ」

文哲からすれば未樹とは犬猿の仲。出来れば会いたくもない存在である。しかも、未樹が文哲を無駄に買っているという所がまた曲者である。暇さえあれば文哲に科学者に戻るように進言してくる。

「いつもの話なら断る」

「アラ、残念」

未樹もこのやり取りにも慣れていた。未樹は文哲が科学者に戻ったとしたら、過去の如何なる有名科学者よりも名が売れることになると確信している。未樹はそんな文哲を尊敬している。そして好感を抱く人物がその才能を使おうとしないことを憎んでもいた。

「でも、今回はそのことじゃないのよ」

未樹もそれよりも重要視したいことがあった。

「ワタシも現場を見たわ」

”巨大生物”が現れて村を壊したという場所を見た。確かに何らかの”巨大”な”生物”が練り歩いたと言われて納得する足跡のよくな証拠も見つかった。

そのような話を聞かされても文哲は眉一つ動かさない。

「アタナも見たのよね？」

「少しだけな、情報を得たいならオレに聞くよりも他の連中に聞け」  
「ソレはもう聞いたわよ。私はね、色々な装置を持ってきて手がかりを探したのよ。それほど巨大な生物が今現在に現れたとしたら、何かが必ずあると思ってね」

未樹は、放射能などの観測も行った趣旨を文哲に伝える。

「生物の話はオレに報告しても門外漢だろ」

「……問題はここからよ」

そう、問題は文哲の作った観測装置が反応を示したことである。

「アナタの作った観測装置が反応を示したのよ」

今まで邪険に扱ってきた文哲の顔色が変わる。

「なんだと、それはどこにあつたやつだ」

「そうねえ……軍が解体されたときにドサクサにまぎれてワタシが入手してきたヤツよ」

アウターエナジー　それがドラコの出現の要因に関わっているのかと文哲は考える。ありえない、と思いたい。だが、アウターエナジーは無限のエネルギーを得られるということ以外良く分かっていない。

（クッ！ 過去の自分を消してやりたい気分だ）

だが、アウターエナジーは生物に対して放射能のように有害ではない。それは、アウターエナジーに関わっている文哲自身が生き証人である。

（何故ドラコからアウターエナジーの反応がする……）

文哲は1人で考えるが結論は出ない。

「データはあるか？」

「もちろん、あるわよ」

未樹は観測機器が吐き出した印刷用紙を文哲に差し出す。

文哲はそれをひったくるように受け取ると目を通した。

アウターエナジーの残留濃度は、地上で観測できる数値よりも遥かに高い。

「これを見る限り、ソノ”巨大生物”が接触している場所に数値が高いことが証明できるわ」

観測データに未樹は自分の意見を付け足す。

確かに数値は、足跡等ドラコが接してた部分にその証拠が現れている。

（このデータが示すものは何だ……）

これほど顕著にアウターエナジーが残留しているという意味を考える。

ドラコがその全身からアウターエナジーを浴びているとしたら

（いやそれでは説明がつかない）

1回浴びたと仮定する。まずドラコがアウターエナジーを浴びたとして、それが地面に残るか……答えはNOである。

過去の実験からはそのような結果はありえないと予想できる。

（ありえるとしたら、オレの考える以上のアウターマナを浴びてるのか？）

考えれば考えるほど、冷静になればありえないとすら思える考えが頭に浮かぶ。

（まさか、ヤツ自身アウターエナジーを発する生物だとも言っ

か！？)

そんな結論を出せばアウターエネルギーの仮定すら崩してしまう暴論だ。アウターエネルギーはホールを空けることによって流れ出てくるエネルギーである。アウターエネルギーを用いた駆動炉は、この炉内に限定的にホールを空けることによってアウターエネルギーを得る。これを既存のエネルギーに変換することによって、始めて人間はアウターエネルギーを使えるようになる。

だが、そう考えれば納得できる部分もいくつか存在する。

相手が生物だと考えるから分からなくなる。文哲は考え方を変える。

相手が自分の作り出した駆動炉と同じ無機物であると考えたと、この結果は出るのか……答えはYES。十分にありえる。常にアウターエネルギーを供給できる状態ならば、足跡にだいたい同じ量のアウターエネルギーを付着させることは出来る。

だがホールを空ける技術は文哲が考え出したものである。常にアウターエネルギーを発しているとすれば生物の体内にホールが存在することになる。ホールを空ける技術は、実に危険なものでもある。兵器に利用されたように、あまりにも大きいホールを空けたのならばドラコの体内からホールに飲み込まれてしまう危険性がある。

(そんな生物がありえるはずがない)

アウターエネルギーを内包し発し続ける生物　ドラコ。もはや人知を超えている。そして、自分がアウターエネルギーを発見した後に確認された事実。この2つが無関係であると思えるほど文哲は樂觀視することは出来なかった。

『帰ってくれ』

そう言われ暗い顔で自分の家に戻っていた文哲に詳しいことを未樹と絵梨佳は聞くことが出来なかった。

「文哲さん大丈夫だろうか」

絵梨佳は不安に思う。

「確かに、アレは只事では無さそうね」

「未樹もそう思うのか？」

未樹と文哲の付き合いは絵梨佳よりも遥かに長い。

「アレは絶対に何かあるわ。文哲は感情をあまり見せないけど、言われるほど冷徹な人間じゃない。でも、昔似たような顔を見たことがあるわ」

未樹は思い出す。確かあれは5年ほど前だったろうか、文哲が他の人間と余り付き合わないようになってしまった原因。

「絵梨佳は知ってる？ 文哲が科学者で何を研究してて、何故科学者を止めたか」

「研究してた内容は聞いたことがある。なんでもあの終戦兵器を開発した人だとか、研究者を辞めたのも自分の身を守る為だとか」

絵梨佳が文哲を尊敬、崇拜の念で見ているのは、それが理由である。

「そう、そこまで知っているのなら話すわ。確かに、終戦兵器には文哲が開発した技術が使われている。でもそれは、文哲の意思を無視して作られた物よ」

絵梨佳は衝撃を受ける。大佐の話からは聞いていない情報であった。

「そんな馬鹿な!？」

「そう？ じゃあ、文哲が協力していたのならば当時の軍があのまま戦争を終結させたかしら」

当時の独裁的な国が核兵器よりも協力的な兵器を量産できる体制にあるなら、条件付きであるとはいえ戦争が負けで終わるはずがない。」「……………」

「分かるでしょ？ 文哲は、自分の技術を兵器に流用された。でも、作り方までは教えなかった。だけど、その事実を知ったときの文哲の顔はあんな感じだったわ」

もし、その通りだったとしたら、

「気の毒だ……」

絵梨佳は素直にそう思う。

「アラ、そうかしら？」

それに対して未樹は一見すると冷たいとも思える態度を取る。

「アナタも、そして文哲も”科学”というモノを理解してないのね」  
「どういうことだ」

絵梨佳が問う。

「過去にノーベルが作った削岩用に作られたダイナマイトが兵器に使われたり ”科学” なんてね…… 所詮、政治や戦争の道具ではないのよ。過去の人物がそうであるように文哲もそのうち再び強制的に研究させられる日が絶対に来る。そうなった時に、命を盾に強制されるぐらいなら 自ら表だって研究して自分の身を守る方が得策じゃない」

そう言う未樹の表情には、今まで絵梨佳の見たことのない表情  
冷たく言うものの愛情のような物が見て取れた。

「未樹でもそのような顔をするのだな」

「へ？」

未樹が素っ頓狂な声を出す。

「そのような顔ってどんな顔よ」

鏡を持っている訳ではないので確認することは当然出来ない。

「慈愛に満ちたというか、愛情を感じさせる顔だった」

付き合いは長くとも少なくとも絵梨佳は今まで未樹のそんな表情を見たことはなかった。

「バ、バカいうんじゃないわよ…… そ、そんな訳ないじゃない。あ、あ、愛情なんてそんな知識にもならないモノをワタシが持ち合わせる訳 ありえないわ、何いつてるのかしらこの娘」

「ふふふ、未樹も年相応の少女だったという訳だな」

未樹は苦虫を噛み潰したような表情をし、反撃に移る。

「そ、そういう絵梨佳の方が文哲のこと気に掛けてるじゃない」  
「わ、私がか!？」

「そうよ、隠したって無駄よ。アナタの文哲を見る目は尊敬や崇拜だけじゃない」

「そ、そんなことないぞ」

「アラ、アナタの今の顔是非とも鏡で写して見せて上げたいわ」

「馬鹿をいうのは止める」

2人してギヤーギヤーと言い合う。

歩いてるとカメラを持った男が見えた。

「ちょうどいい、目の前にカメラを持っているヤツがいるじゃない。取って見て貰おうかしら」

モノクロ写真では精々恥ずかしがっている顔が映るぐらいだろう、が未樹は絵梨佳を挑発する。

「あれは時任ではないか？」

未樹が指差す人物が知り合いであることに気が付く。

「フーン、知り合い？」

「ああ。文哲さんの友達に当たる人だ」

絵梨佳はそう認識していた。

「今のあの文哲に友達……ねえ」

未樹にはとても信じられなかった。

智の方も絵梨佳達に気が付く。

「あれ、黒木さん。どうしたんですかこんな所で」

智は絵梨佳ならきつと率先して復旧に尽力していることであろう、思っていた。

「それに隣の人は？」

智にとつてはまるで知らない少女が立っていたので問う。

「ああ、この人は……」

「ワタシは、生物学者の河内未樹よ！！」

まるで印籠を差し出すように予備隊から支給されたネームプレートを見せ付ける。

「こ、こんな女の子が生物学者！？」

智は驚く。それも当然であろう。明らかに自分より年少の少女が



学者だというのだ。しかもそれが予備隊の客員だというならば、学者上の立場がどれほど高いか……智には想像もつかない。

「まったく失礼ねえ……これでも、文哲と同じ年なのだけど。それはそうとこちらは名乗ったんだけど」

「あ、これは失礼しました」

智は咄嗟に常備していた名刺を差し出す。そこには智自身のフルネームと新聞者名が書かれていた。

「へえ……こんなに地味なのにねえ、いや地味だからいいのか島人に馴染んでるし」

未樹は地味に酷いこと言い、

「な、何！ 貴様、マスコミ関係者だったのか！！」

絵梨佳は驚いた。

「ひつ、べべ、別に身分聞かれていませんよ。僕」

「ツ！ てつきり、島民だと思っていた」

絵梨佳はここ数日智というなかで重要な情報をばらしていないか思い出す。

「何故だ、貴様漁船事故が起こる前に既に島にいただろう」

「そ、それは別の目的で来てたからですよ」

「その目的聞いてもいいかしら？」

「未樹なにを？」

未樹は智に興味を持った。新聞記者という身分でありながら、文哲の側にいるこの男が気にかかる。

「別に構いませんよ。僕は上司から、大門島にいるらしい戦争を終結に導いたと言われる天才科学者のことを記事にするように言われてきたんですよ。まあ、肝心の人は見つかっていないんですが、それよりも事件が起こりすぎて大忙しですけどね」

絵梨佳は息を呑む。智がまさか文哲を探しに来ているとは少しも考えはしていなかった。

「まあ天才科学者なんていないんでしょうけど」  
「いるわよ」

未樹は何の迷いもなく告げる。

「へ？」

智は気の抜けた返事を

「未樹！？」

絵梨佳は大声を上げる。まさか、未樹がばらすとは思ってもしなかった。

「絵梨佳、少し黙っていなさい」

未樹には考えがあつた。そうこれも全て文哲の為だと。

「いやだなあ、確かに目の前にいますけど……冗談は」

「冗談じゃないわ。ソレにワタシは”天才”じゃない、あくまで”才能”があるだけ。最初に会ったとき何故驚いたのかと思つたけど、そこまで情報を持つてるのに肝心なことを知らないのね」

「それは尋ねて答えて貰えるのですか？」

智は唾を飲み込む。

「もちろん。知つたアナタがどうするのもアナタ次第よ」

未樹はこの情報を知つた智がどうするのが分かる。少しでも脚色するだけで智は文哲に再び研究者に戻るよう説得に行くことも

拒否されても相手は新聞記者、情報が広げれば文哲が取れる行動は1つしかなくなる。

「その人の名前は、永峰文哲。アナタも良く知る名前でしょ」

「……」

智が絵梨佳顔色を伺つと、苦い顔をしていた。それだけでもこの情報が正しいことが分かる。

「でも、戦争の時と言うと彼は、小学生じゃないですか……」

だがこの疑問を問うても、解は変わらないかもしれない。否定を言葉にする智の頭にそういう考えが浮かぶ。なぜなら、

「アラ、目の前のワタシを見てもそう言えるのかしら。ワタシも当時の軍属科学者よ。まあ、専門が生物学だから同時の軍には何の役にも立たなかつただろうけど」

そういうことである。

「そうね……戦争を終結に持っていった、あの兵器さえあればこの島に現れた巨大生物も倒せるのではないのかしら」

そう付け加える。これで智が取る行動が予測される。

「これくらいでいいかしら？　ワタシもやらなくてはいけないことがあるので失礼するわ」

未樹は啞然とする智の顔を後にする。そして絵梨佳も後を追う。もちろん絵梨佳は怒っていた。

「何故、あんなことをマスコミに言った!!」

「ただの善意よ。文ちゃん、ワタシ達が何を言っても動かないじゃない。それなら彼にやつてもらうしかないわ」

「だが……文哲さんの意思は!!」

「じゃあ、何？　アナタはあの巨大生物が現れた時にまた人を見殺しにする気？」

「それは予備隊が……」

絵梨佳が自分達で何とかするという。

「無理ね」

未樹はそう切って捨てる。

「予備隊を動かすにしても時間が掛かる。なんとかするには次に現れた時に一撃で倒す必要がある。文哲の力が必要よ」

それに加えて、未知の生物に対して使うのならば文哲の罪の意識も軽くなるのではないかと考慮してのことだった。

そう言われてしまつては、絵梨佳は口を挟むことが出来なくなる。実際に今回、予備隊は間に合うことが出来なかったのだ。

「……私は復旧作業に行く」

理解は出来ても納得は出来ないそのような態度を示す。

「そう」

未樹も別に絵梨佳に納得してもらおうと思っていた訳ではない。文哲を失うことそれが恐ろしかったただけであった。

未樹は被害現場に置いてきた機材を弄っている。

もちろんその計器は文哲の作った、アウターエナジーの計測機である。

どこを図っても計器の示す値は一定であった。

「あら？」

計器が狂ったように動作を示す。動作内容としては、計器の針が振り切れんばかりに動いているのである。

「壊れたのかしら」

古い機械である。いつ壊れてもおかしくはない。

目の前には絵梨佳がいるだけである。……いやもう1人いる。

「玉希は力持ちだな」

「えへへ。すごいでしょ」

頭から足の先まで真っ白な少女。それが意図も簡単に壊れた家の角材を運んでいるのである。

「まさか……いえいえ、ありえないわ」

計器が壊れていないのでは……生物学者からすれば目の前の光景も信じられないものである。

未樹は計器が壊れていないことを確かめる為に、彼女達の側を離れた。

## アウターエナジー（後書き）

こんばんわ、呉璽立児です。

後2話程度で完結を目指しています。

最後までよろしく願います。

## 友達

「はあ……」

智はふとため息を付く。

大門島の怪獣災害から丸2日が経った。漁村では予備隊員達という人手もあつて瓦礫が少しずつではあるが片付けられていた。

智は被害の状況を写真に撮り、そして記事となりそうな事をメモに取る。

「本社に戻らないといけないかもしれないなあ」

智はそう思う。

被害状況を電話で伝えることは出来るだろうが、写真を送るには時間が掛かる。第一、言葉伝では被害の重要さがうまく分かってもらえないかもしれない。

この災害を目の当たりにした自分自身がこの事件を世に伝えなくてはいけない、智はそう感じていた。

「フミさんに会わないと……」

智がこの島に来た目的　天才科学者、戦争の英雄。そう言われる、永峰文哲と言う少年。この島において一番身近であつた文哲が、昨日それほどの人物であるということを河内未樹から聞いた。信じられない……そう思いもした。だが彼の怪行動を照らし合わせて考えると納得する部分もあつた。

文哲はどう思ってるか分からないが、智は文哲のことを尊敬できる人物であり、友人のように思っていた。そんな人物に科学者であるのか問はなくてはならない。そして、未樹の言うとおり文哲の研究は、”怪獣を倒すことが出来るのか”そういったおそらく文哲に都合の悪いことまで聞かなくてはいけないだろう。ここに智の感情が入る余地は無い。怪獣を倒すことが大衆の意見であろうし、亡くなった者達の遺族が求めることであろう。放置すれば怪獣はいずれ大きな都市に現れて、大きな被害を起こすかもしれない。そう

ならないためにも、怪獣を駆逐する為に文哲の力を借りねばなるまい。目の前に迫りつつある危機、そしてその危機を打開することができるということを皆に伝えること　それが新聞記者である智のすることである。

智は心に決めた。

突然ボォーと汽笛が海岸線の方から聞こえてくる。

智が見れば、2隻の護衛船の内1隻の煙突から煙が上がっているのが見える。船が出港の準備をしているのだ。

「時任！！」

智を呼ぶ声が聞こえる。振り返ってみれば、絵梨佳がこちらへと走ってくる。

そんな彼女の様子はいつも以上に落ち着きが無い。

「こ、これを、文哲さんに……」

そう一言告げると、智の手に白いハンカチに包まれた物を手渡す。

「頼んだぞ」

智が何かを話す前に絵梨佳は立ち去ってしまう。絵梨佳は港の方へと駆けていった。

「なんなんだ」

意味が分からなかった。ただ1つ分かるのは絵梨佳が尋常ではない焦り方をしていたぐらいであろう。

手渡された物は、手紙か何かに見える。ハンカチに包まれているので中身までは見えないが薄い。だが何か小物も一緒に包まれている。

ポロつとハンカチに包まれていた、小物の方が地面に落ちる。

「これは……」

智にはコレに見覚えがあった。

それは玉希が文哲から買ってもらい、嬉しそうに自慢していたあのブドウと花の髪飾りであった。

文哲は地下の研究室にいた。文哲の出した結論は、これ以上アウターエナジーを知らぬ存ぜぬで通すことが出来ないということであった。アウターエナジーは確かに便利な力である。だが強大すぎる力は争いを生む。

文哲は、たつた今神無島にある実験駆動施設の停止装置を開発し終えた。それはとても簡単な作りでボタン1つで半径10メートル以内にあるホールを閉じさせるという代物である。ホールさえ閉じてしまえば施設を壊すことは非常に容易である。

文哲は作業をやり終えたことでなにか肩の荷が下りたような感覚を得る。そして、何か空しさも……。

「これで、オレのやり終える仕事は終わった」

文哲が大門島に来た目的が実験施設を止めることにあった。この空しさは、それをやり終えたことから来るものかもしれない。

文哲は家から外に出る。

心なしが、この作業を終えることに躊躇があったのかもしれない、文哲はそう思う。大門島はいい所であった。

「特にここ最近楽しかったなあ」

玉希に智、絵梨佳……そしてドラコ。その時は楽しいとはちっとも思わなかったが、今はそんなハチャメチャな日常が思い出される。

「フミさん!!」

そう文哲を呼ぶ声が、回想される。

「フミさん!!」

それは幻聴でなく、実際に智が文哲に向かって駆けてくる様子が見て取れる。

「何しに来やがった」

面白くなさそうに、文哲はそう言う。

「フミさん、こ、これ、絵梨佳さんが渡してくれて……」

そういつて智はハンカチに包まれた手紙を手渡す。

文哲は包まれていた手紙を開く。

「……………」



そこには短くとも達筆な字でこう書かれていた。

『未樹が、玉希を誘拐した』  
と、

「それとコレも……」

そういつて智は、文哲の手に小物を手渡す。

それはブドウと花と髪飾り。

『ほれ、動くなよ』

『これでいいか』

『あ、ありがとう』

『お、おう。用が済んだら行くぞ』

『うん!』

玉希が嬉しそうに受け取ったあの光景が思い出される。

「あのバカ野郎!」

それは未樹へと向けた言葉であった。

どうやって玉希を連れ出したのかは分からないが未樹がドラコの娘をこの島から連れ出した。

>>GUWOOOOOO<<

「ふ、フミさん、あれ!! か、怪獣!」

高い所にある文哲の家からはつきりと見える。黒い剛毛で覆われた怪獣 ドラコが海からヌーと顔を出し泳いでいる。

ただし行く先は、大門島ではない。大門島から沖へと離れるように……。

「あのバカ野郎」

文哲はもう一度その言葉を呟いた。

何かを知ってるように感じた智は、文哲に尋ねる。

「どうということなんですか? その手紙とあの怪獣は関係あるんで

すか!!」

「おい、船は 予備隊の船はどうした!？」

「さっき1隻出航しましたけど……」

「手遅れか」

文哲は絶望する。

「いい加減に教えてくださいよ！ あなたは何を知ってるんですか」

「アレは 船を追いかけたんだろう……」

「な!!」

どうなるかは智にも分かる。あのとてつもない力を持つ怪獣が船を襲ったらどうなるか。船の方が早かったら助かるかもしれない……いや、結果はもっと最悪になる。船を追いかけた怪獣がこの国の大都市に上陸するという事態にだ。

どうして、そんなことを知ってるんだ、智は文哲に対してそう思う。だがそれ以上に言わなくてはいけない言葉がある。そう、目の前に怪獣が現れたのならなおさら。

「だったらフミさん……。あなたの研究であの化物を倒してください」

智がその話を持ち出してきた時、文哲は驚いた。もちろん顔には出さない。

「……何のことだ」

文哲はあくまでシラを切る。

相手が、ただカマを掛けているだけということもある。

そうであって欲しい、文哲は切にそう願う。

「フミさんが、戦時中に兵器を作ったということは知ってるんです!」

智は声を上げて言う。

「このハンカクサイ、オレがか？ 八つ、冗談も休み休み言えよ。そんなときのオレなんかまだ餓鬼だろうが」

「未樹さんの話を聞いてその言葉で納得することは出来ません。あの船だってフミさんが作ったんでしょう?」

奇しくも智の言葉は見事に的中していた。

「未樹に会ったのか……」

「ええ、フミさんの話を聞きました」

文哲の声にはこれ以上騙すことは出来ないという諦めの感情が籠っていた。

「どうしてですか！？　どうして、あの兵器を使ってくれないのですか？」

その言葉で文哲は憤怒する。

「兵器だと。ああ、その通りただの兵器だ。それをどうして……、よりによつて、何故お前がオレに、しかも”アイツ”に対して使えと言っ――」

文哲がこれほど激しく感情を顕わにしたのは始めてであった。

「フミさんこそどうしてですか。どうして分かってくれないのですか！！　このままではこの島以上に人が死ぬかもしれないというのに――」

「そんなことオレの知ったことじゃあない」

文哲には文哲の、智には智の考えがある。智はこの後に起こる悲劇を回避しようと考えているだけで、文哲はもし使ってしまった後の未来を考えているだけである。

どちらかといえば、智の考えの方が大衆的だ。文哲の考えは兵器を作ってしまった科学者の考えでしかない。

口だけであればあまりにも冷徹な文哲に対して智も怒る。興奮のあまり手が出る。

「クッ！」

文哲の顔に智の拳が当る。

「何しやがる！！」

文哲も殴り返す。

互いがお互いの心のうちをさらけ出すように殴りあう。

智は漁船が沈没した際に我先に救出に行った、その行動力を尊敬していた。だからこそ、そんな文哲が、大衆を見捨てるような発言

をしたそのことが信じられなかった。

文哲は文哲で、自分でも気が付かぬ間に友と呼べる人物が出来ていたとは思わなかった。だからこそ智にアウターエナジーを兵器として使えと言われたことに腹が立ってしまったのであった。

程なくして2人とも息が切れる。

「どうして……そんなに頑ななんですか……」

「……………」

文哲は何も語らない。

「このままじゃあ、タマちゃん、絵梨佳さん、未樹さんだって危ないというのに……」

「……お前には……大切な人はいるか？」

文哲は智の話題には触れず聞く。

「それはいますよ。だって皆友達じゃないですか。それに本島には親だっていますし」

その友達の括りの中にはもちろん文哲も入っていた。

「そうか……ならばお前の勝ちだ」

文哲はそう言う。

「名前の知らない誰のためでもない。絵梨佳、未樹そして智、オマ工達の為にオレの研究を使おう」

「へ？」

質問に答えただけで折れた文哲に、智は拍子抜けする。

文哲は奇怪な船を持っている。それで追いかければ、そう智は思った。世紀の瞬間の目撃者となれるかも知れない。

「今から行くんですよね、それじゃあ僕も……」

そう智が言った瞬間だった。

文哲は護身用に作ったスタンガンで智にあてがった。

智が目を覚ました時、文哲の家のソファーに寝かされていた。そこに文哲の姿はなかった。

「フミさん……?」

机の上にはボタンが1つだけ付いた装置と手紙が置いてあった。

## 友達（後書き）

次回、最終話：永峰文哲  
ご期待下さい。

## 永峰文哲

「港までは？」

「後1時間ほどです」

ここは大門島から出航した護衛艦・樂古の操舵室である。未樹の質問に予備隊員の1人が受け答える。

「未樹……」

そんな未樹に対して心苦しそうな表情を浮かべる人物がいる。

「アナタはまだそんな顔をしているの？」

「だが、未樹。幾らなんでもこれはやり過ぎだ」

絵梨佳は、未樹が玉希を誘拐しことを未だに納得していなかった。玉希は麻酔で眠らせて船倉に幽閉されている。

「未樹これは犯罪だぞ」

「いいえ、違うわ」

未樹は断言する。

「絵梨佳。アナタはまだアレを人だと言い張るの？」

未樹は嘲笑する。

「どこらどう見ても人間だろう。私は未樹の意見の方が分からない」  
未樹は玉希が人間でないと言い張っていた。

確かに玉希はこの国の人間があまりしないような格好をしている。だがどこからどう見てもただの少女にしか絵梨佳の目には映らない。「ワタシがアレに打ち込んだ麻酔薬の量知っている？ アフリカゾウでも致死量になるぐらいの量よ。それで始めてアレは眠いつて欠伸をしたのよ。ソレが人間だなんて信じられる？」

麻酔薬は摂取量が少ないと効果は無いし、多すぎると死んでしまう、取り扱いが難しい薬だ。それを躊躇無く象が死に絶える量を玉希に打ち込んだ未樹に絵梨佳は恐怖を抱いた。

「……だが、彼女がもし人間でないとしても……それでも彼女は人間の様に話し、考えることが出来る、それなのに未樹は！？」

「そんなの関係ないわ。考えることはきつと人間でなくたって出来る。ソレなのに人間はそんな動物だって殺すでしょ？ それだけじゃない人間は人間ですら殺すわ」

未樹はその定義を個人の価値観の違いでしかない、と捕らえている。

絵梨佳も特定の場面に出会えば人間にさえ引き金を引く覚悟もある。だから反論することは出来ない。もしこの世界の生物学が発達して、もし家畜に人間と同様の思考能力があると発表されたらどうなるだろう？ 家畜を殺さない？ それとも今までと同じように殺し続ける？ それはやはり個人の価値観によって決めるしかないのではないだろうか。

「それにねワタシはアレが大門島を襲った巨大生物と関係があるのではないかと睨んでいるわ」

「え！？」

未樹の考察は当たっている。大胆な発想を持つ未樹は1人でその考えまで至った。その点を考慮するならやはり彼女は”才” 能がある生物学者であった。

「ソレが文哲の研究と関係している以上ワタシはアレを放っておけない」

未樹が文哲に関係のある玉希を連れ出した以上、文哲は未樹を追いかけて来るしかない。未樹はそう考えている。

「未樹……」

未樹の考えが理解できないことはない、絵梨佳はそう思うが、それでも未樹の考え方は歪んでいる、絵梨佳の価値観はそう認識してしまう。

「こ、後方から何か来ます……」

船員が突如そう報告した。

「何！？ 船か？」

「いえ、分かりません。ただ向こうの速度はこちらの速度を上まっております。このままでは、30分……いえ20分後には接触しま



す」

本船を追跡してくる何か……。絵梨佳は何か嫌な予感がした。

「私は甲板に上がる。何かあれば連絡しろ」

「りよ、了解しました」

絵梨佳は甲板に上がる。甲板には周りを観測する為の望遠鏡が付いている。それで絵梨佳は後方を覗く。

まだ距離が遠く、はっきりとは見えない。

だが、それは大きな水しぶきを上げつつこちらに近づこうとしている。

確かに船では無さそうであつた。

「あれは……!?!」

文哲は1人船を操舵している。

文哲の船はアウトーエナジーを利用して動いている。その為実際のどんな船よりも早い。そして彼の船は、レーダー上に一隻の船……それと1つの物体を捕らえていた。

「龍子……」

彼女の姿が思い浮かぶ。

「ふっ」

文哲の顔は至って真剣だが、ふと噴出す。

思ってみれば、ここ数日楽しかったのは彼女が原因であつたような気がする。ドラコがいたからこそ皆との繋がりが生まれた……そんな気がする。

だからこそ幕を引くならば自分が引かねばならない。

文哲の船の位置はドラコの真横である。

今の彼女に文哲の姿は映っているのだろうか。いやきっと映っていない。彼女が島で大暴れした時、その原因を作ったのが玉希への危害であつた。そのこと考えると、ドラコの目に自分は映っていないのかもしれない

今文哲の目的はドラコではない。文哲の船はドラコの横を通りすぎる。怪獣としてのドラコの姿は獰猛そうで恐ろしい。正体が分かっている文哲は体が震えてしまう。

護衛船に向かって文哲の船は突き進む。

ここからは時間との勝負だ。迅速にあの船に乗り込み玉希を確保しなくてはならない。文哲は護衛船の足を止めて飛び移る予定でいる。だからドラコが2隻に追いつく前に玉希を取り戻すことに成功しなければ共にドラコの手には掛かることになる。

もう護衛船は目の前だ。

「さあ、行くぜ」

文哲は自分の船の速度を上げる。

「ふ、不明船が突っ込んで来ます」

「来たわね、文哲」

護衛船の操舵室では未樹が笑みをこぼした。

一方甲板では、

「文哲さん！」

絵梨佳は彼の突拍子も無さに驚いていた。いや、これこそが永峰文哲だとも思った。

そして彼に……

文哲の船は船首から護衛船の右舷にぶつかると見せかけて舵を切った。文哲の船の左舷と護衛船の右舷がぶつかり火花を散らす。

ギギギと金属同士が擦れる音が耳を劈く。

文哲の船は、船体を擦りながら護衛船の右舷船首の方へと抜けて行き、そのまま護衛船の進行を遮る形で停船した。衝撃は強かったがどちらの船もおいそれと沈没する船ではない。ほぼ同等の大きさをもつ2隻の船は、水面にピタリと止まった。

文哲は甲板に急いで出ると護衛船へと飛び移る。

予備隊員に捕まる訳にはいかない。

衝撃が収まりじきに予備隊員達が甲板に集まってくるだろう。武装といっても智を気絶させるのに使ったスタンガンぐらいしかない。訓練を摘んでいる多勢にぶつかるには無理がある。

「おい、お前!!」

見つかったか!、そう思い文哲はスタンガンに手を掛けた。

「ツカア!!」

そんな悲鳴を漏らし予備隊員の男が甲板に倒れる。

背後の後ろから手刀で気絶させられたのである。

男の後ろから現れた人物は、

「オマエ……」

それは絵梨佳であつた。気分は進まないが文哲は再びスタンガンに手を掛ける。

「文哲さん、こちらです」

文哲の意に反し、絵梨佳は身を翻すと手招きをする。

文哲が行動を決めかねていると、絵梨佳が再び口を開いた。

「玉希ちゃんの所までご案内いたします」

絵梨佳走り出し、文哲も後に続く。

疑惑もあつたが今は時間が惜しかった。

走りながら、絵梨佳は文哲が問いかける前に自答した。

「私はやはり末樹のしていることは間違っていると思います」

絵梨佳は自分のしていることが正しいとは思っていない。だが、このままあの少女を見て見ぬことはできなかった。このまま文哲を拘束したならば、きっと文哲は命の危機に晒すことも無いのだろう。しかし、これでは強制的に研究させられる者と研究されるモノを生み出してしまうのではないかと、思う。そして船に迫る巨大生物

きつと船倉に捕らえられている彼女に関係がある。このままでは大都市を危機に招いてしまうかもしれない。

「でも、私は文哲さんが心配です」

このまま玉希を引き渡せば今度は文哲があの巨大生物に狙われるのではないかと。

「大丈夫だ。オレはアイツをいるべき場所に返したいだけだ」

きつとこの世界はドラコも玉希も住み難い場所である。文哲は彼女達を本来いるべき場所へと返したい、そう感じている。

「アイツらは……その友達だからさ……」

文哲はそう照れくさそうに言う。

「そう……ですか……」

絵梨佳は文哲のその言葉に頷くしかなかった。文哲の事は未樹から聞かされた時点で孤独な少年であると知っていた。その彼女を友達と呼ぶのだ。きつと彼に突拍子も無いことをさせるほどの人物なのであろう。そして、絵梨佳は少し残念に思った。

「恥ずかしいことなんだがな、智に言われて、殴られて始めて気が付いたんだ。龍子や玉希、智そしてオマエ いや絵梨佳。オマエ達がいっつの間にか友達だと、そう思っていたことに。おかしいだろ、人を遠ざけるようにあの島にいったオレがオマエ達をそして島の人達を守りたい、そう思ったんだ」

そう聞いた絵梨佳は嬉しかった。だが嬉しいはずなのに何故か彼に僅かながら危機感を抱いてしまう。

今は感情を頭から追い払う。絵梨佳は文哲を船倉まで導き、彼の船まで送り届けねばならない。

絵梨佳は文哲より走るペースを上げると、船倉の前にいる護衛を気絶させる。

「文哲さん、ここです」

船倉の扉を開けると玉希が倒れていた。

「まったく、どうやってコイツを誘拐したのかと思えば」

文哲は冗談交じりに言う。

確かにとんでもない力を持つ玉希を攫うのは容易ではない。だからこそ眠らせてしまえば簡単に捕まえられる。

「おい、起きろ」

文哲はぺちぺちと玉希の頬を叩く。

「かなりの量……そして定期的に麻酔を投与されています。大丈夫でしょうか？」

未樹は象でも死に至る量だと言っていた。だから彼女の容態が心配であった。

「う……うん」

絵梨佳の心配は無用であったようで、玉希は目を覚ます。

「ふーちゃん？」

玉希はフラフラとしながらも立ちあがる。

走ることは無理そうだ、と文哲は思い玉希を少し乱暴に背負つ。

「甲板まで出るぞ」

「はい……」

文哲と絵梨佳は着た道を戻る。

甲板まで戻ると船中の予備隊員が文哲の船の前にまで集まっていた。

「文哲さんは船に戻ってください」

絵梨佳はそう言うと言と予備隊員達に向かっていく。

文哲は玉希を背負いながら、船へと近づくがそこにも隊員がいる。

「ふーちゃん、あたしももう大丈夫」

そついうと玉希は背から降りる。

すっかり目を覚ました玉希がいるなら文哲も心強い。

「ああ、頼む。だが手加減しろよ」

「うん」

玉希は目の前にいる予備隊員を掴んでは投げる。

手加減はしていて、海に落とすことも無く甲板の中央に向かって放る。

身体を強く打ちつけ、こちらに再び向かってくることは無いだろう。

「乗るぞ」

「うん」

文哲と玉希は文哲の船に乗り込む。

だがここまで来て絵梨佳のことが心配になる。

「私のことは気にせずに行って下さい！！」

絵梨佳はそう叫ぶ。

連れて行くわけには行かない、と元々思っていたが、背を押され文哲は意を決める。

そして最後に護衛艦を見たとき、昔から親しくしていた少女が啞然とこちらを向いていることに気が付く。

その顔は、どうして、と言っていた。

「何故！？ ワタシはアナタの為に思っているのに！？」

冷静さを失い、言葉に主語はなかったが未樹のしよつとしてきたことは分かる。

全ては、自分の為であったのだ。文哲は理解している。そしてこ  
うも思う。

（こんなにオレの為に必死になってくれる人がいたんだ）

智も絵梨佳も、そして未樹も……文哲の為に必死になっている。

（だから、こそ）

自分は、友達を守らなくてはいけない。

見知らぬ誰かの為ではない。大儀名文を掲げた所でそれは言い訳にしかない。

友達が文哲の為に必死になっているように、

（オレも友達の為に必死になろう）

そして文哲は未樹に向かって叫ぶ。

「……ありがとう！！」

それで未樹が救われるとは思わない。未樹がしたことが間違っている。だが、自分の為にそう行動してくれたことが嬉しかった。

文哲は船を発進させる。

「文哲！！」

「文哲さん！」

そんな彼女達の声が聞こえた気がした。

だが振り向かない。

文哲は怪獣 ドラコに向かって舵を切る。

ドラコはこちらに進んでくることも無く、立ち止まっていた。  
「なんだ、分かってくれてたんじゃないか」

些細なそんなことにも一喜する自分におかしくなる。

「ふーちゃん、どこにいくの？」

玉希がそう尋ねてくる。

「そうだなあ……オマエ達がいるべき場所にな」

「ふーちゃんもそこに行くの？」

「ああ、一緒に行く。オマエ達を2人で行かせたら何をしでかすか分からんからな」

文哲はアウターエナジーに関する計器を弄る。

炉をオーバーロードさせ……ホールを開く……。

「文哲、アナタ何をする気……」

「文哲さん!？」

護衛艦の甲板から見ていた2人が見たのは、まるで衝突するかのようには高速で巨大生物に向かって文哲の船がぶつかっていくかのような光景。

「フミさん……貴方はなんて事を」

大門島では、智が港で立ちすくんでいた。

その手には手紙を握り締めながら。

海上で大きな光が巻き起こる

発生源は文哲の船である。

その光は怪獣と1隻の船を飲み込む。

アウターエナジーを放出するその穴に向って飛び込む。

その先に何があるのかは分からない。

ふと目の前の大きなドラコと目が会う。

『コレデ……イイノカ』

そう言っているように見える。

「いいんだ」

別に命を捨てる訳ではない。

研究も何もしていない。ただその穴の向うには彼女達が住まう世界があるのではないかそう思っただけである。

前例も仮定もない、ただ直感を信じる。

ただ1つ心配があるとすれば、あの全ての始まりの島　神無島  
に実験施設を残して来たこと。

「いや、信じよう……友達を……」

光は大きくなり眩しくて目を開けてはいられない。

動力を失った船は停止する。最後に計器は計りきれない程のアウターエナジーを計測した。

手紙には簡単な実験施設の停止方法が書かれていた。そして、  
『まあボタン1つだ。簡単だろ？ アレをどうするかはお前に任せようと思う。そして、オレのことを記事にすることも。友達と言っ



てくれたお前の言葉嬉しかった。ありがとう。

哲

永峰文

## 永峰文哲（後書き）

ドラコ完結です。

書き始めて約2カ月、物語を完結させることが出来ました。

私はどうせ書くなら怪獣モノが良い、と言いつつ技術が無いからとこれまで後回しにしてきました。

それを達成できた、と言うのは私の中で1つ区切りが付いたと思います。

ただ、あまり読んでももらえなかったのが少し寂しかった……です。もし完結してから読んだ方がいれば痕跡を残していただくとすごく嬉しいです。

物語自体は主人公の自己犠牲の様な形で終わってはいますが、この後ハッピーエンドに繋がるような構想も初期からありました。ただ、それではあまりにも都合主義と言うこともあり、文哲と怪獣2頭は旅に出たと言う形で完結に至りました。

こうして終わらせて見ると、マイナーなジャンルであったということの評価をもらえなかったと……思いたいですが、やはり自分の技量というものも痛感いたします。まだやれることがあったのではないかと感じます。これから精進してまいりたいと思います。

ともあれ、ドラコはこれでおしまい。気分を切り替えて次作に取り組んで行きたいと思えます。

後述になりますが、読んで頂いた読者の皆さんありがとうございました。

また、1話毎に添削をして貰った友人にもありがとうございます。

ということで、あとがきの筆を置きたいと思います。

2011・6・12 呉璽立児

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1155s/>

---

ドラコ

2011年6月12日22時40分発行